
日常が消えたこの世界

松元 淳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常が消えたこの世界

【Nコード】

N9234X

【作者名】

松元 淳

【あらすじ】

2012年12月22日

日英米で死者甦り人を襲うようになった
日本にいる高校3年の片岡光治は八王子を舞台に仲間と共に戦い
そして逃げる

この作品には一部残酷な描写が描かれています

第1話 始まりなんて大抵どれも同じ様な感じ（前書き）

一部、編集しました

第1話 始まりなんて大抵どれも同じ様な感じ

2012年12月22日

皆はこの日に見覚えがないだろうか

そうマヤの予言とかいう予言に記されている人類滅亡の日だ

でも、日本では予言を信じてる人は少ないだろう、信じるのはアメリカ人やイギリス人等といった外国人の方が多だろう

だから、日本人の多くは忘れているだろう

でもこの時、本当に予言が的中するとは思わなかった

そう、こういった事は忘れた時にやって来るから恐ろしい・・・

2012年12月22日

AM:09:30・・・

俺の名前は”片岡光治”

市立八王子高等学校

クラスは3ーBだが、決して「3ねえーんB組！金八せんせえーい！！」じゃないからな

まあ、それはおいといて・・・

今は一時限目が終わって二時限目の授業開始まで時間があるから席でボーッとしている

何故なら・・・暇だからさ！

「よう光治」

二人の男女が来た

「何だ、祐介と綾香か．．」

二人は俺の友人の”佐藤祐介”と”佐々木綾香”だ
二人共、小学校からずっと同じクラスだった
いわゆる”クサレ縁”ってヤツだ

「何だって何よ！

その「また、くだらない話題か、時代遅れの話題か．．」みたい
な言い方は」

「あのなら．．お前らはいつもくだらない事とかしか話さないか
らだろうが全く、オカルト&预言&地球外生命体
オタクも大概にしとけよ」

祐介と綾香はオカルトや预言やUFO等と本当にどうでも良い事を
よく話す

ソレはまさにオタク級だし嫌と言うほど聞いてきたから、だいたい
何を話すか予想出来る様になってしまった

その為、コイツ等が将来近い内に変なカルト集団を創るんじゃない
かと心配だから、必死にオカルト等から引き剥がそうとしているの
にコイツ等は全く理解してくれない

「うっ！相変わらずの毒舌だな．．

そんな事より問題です、今日は何の日でしょう?」

「ヒントは一時期流行ってたやつだよ」

俺はコイツ等行動が大体分かるから答えがすぐにわかった

「ハア．．．（溜め息）」

「マヤの予言だっけ？」

俺は溜め息をしてから答えた

「正解！」

よくわかったな」

「あん時、お前等に嫌と言うほど聞かされたからな頭にこびり付いて取れねえんだよ」

「それは災難だったな光治君」

祐介の野郎

自分でやっというて他人事の様に言いやがって

「そんな事より、今日は予言の日だから何かが起こるよ」

「綾香、ソレは人類が滅亡するって事しか無いよな」

「そつえばそうだね」

もうダメだ頭が持たない

俺は席を立った

「どうした？」

「ちょっと廊下の新鮮な空気を吸いに行ってくる」

俺はフラフラとした足取りで教室を出た

ラジオ体操の深呼吸の様に大きく息を吸い込んだ

「ラジオ体操にしては、時間が遅いし季節も早いんじゃない？」

黒髪のロングヘアー女が声を掛けてきた

「ああ、鈴木か」

朝から冗談をありがとよ

お陰で少し頭が軽くなったよ」

コイツは”鈴木李奈”

俺と同じクラスで剣道部主将で頭も良くそして美人という二次元で
良くありそうな女だ

「またあの二人でしょ」

「ああそうだよ」

「相変わらず大変そうね」

「何だ？」

心配してくれてるのか？」

「そんな訳ないでしょ！

勘違いしないでよ！何期待してんのよ！」

言い忘れていたけど、コイツは”ツンデレ”だ

「はいはい、分かった分かった
俺もお前に惚れられるのはゴメンだ」

「そんなのアタシだって同じよ」

「おーい片岡夫妻、早く席に着けよ」

教室から祐介が呼んで来た
しかも夫妻とか抜かしやがった

「誰が夫婦だ（よ）！！」

俺と鈴木は祐介に向かって怒鳴ってから教室に入って自分の席に着いた

そして俺は前にいる祐介の耳元で
「テメエ、次あんな事抜かしやがったらぶち殺す」
と囁いた

「オオ怖い怖い
でもお似合いだと思うぞ」

「私も李奈ちゃんと光治君はお似合いだと思うよ」

隣の綾香も賛同してきた

「お前等なあ．．．
そういう変な事を言って妙な噂が広まったらどうすんだよ」

「わりいわりい」

「ゴメンね」

「全く」

そして俺は外を見た

俺の席は窓際にあるから暇な時とかはよく外を見ている

此処からは、校庭と校門の辺りがよく見える・・・ん？アレは・・・

「おい、アレは何だ？」

「「ん？」」

祐介と綾香は外を見た

「光治何言ってるの？」

「どう見たって、体育の授業中の女子達と黒川先生じゃないか」

「違う、校庭じゃなくて校門の方だ」

二人は校庭しか見てなかったから校門の方に指を指した

「アレは何だ？」

祐介が双眼鏡で校門の方を見ている・・・って双眼鏡！？

「お前！また双眼鏡を持ってきたるんのかよ！？」

つい最近、校庭で体育の授業受けてる女子を見て担任の尾崎に警告されたばっかじゃねえか！」

「うるせえ！男が女に興味を持って何が悪いんだ！」

「お前の場合は、犯罪に近い事してる様なもんなんだよ！何でそんな単純な事も分らないんだ”変態”！！」

「テメエ！今”変態”って言いやがったな！」

「”変態”に”変態”って言って何が悪いんだ”変態”！！」

「何回も”変態”って”うつさい！！”っ！」

祐介と言い争っていると、鈴木が大声で怒鳴り此方に近付いて来た

「アンタ達、何騒いでんのよ・・・」

ちよつとは静かに出来ないの？」

「ほら見ろ、お前の奥さんがっ」「黙れ（うつさい）！！」「ゴブッ！」

鈴木と一緒に祐介の顔を殴って黙らせた

祐介は倒れてそのまま気絶した

「全く、何でこんな奴とアタシが夫婦に見えるのよ・・・それよりも、さっきから何騒いでんのよ・・・」

鈴木が呆れながら聞いてきた

「ああそつだ、ちよつと外を見てくれ」

「外？」

鈴木はとりあえず窓から外を見た
すると、軽蔑を込めた目で俺を見てきた

「な、何だよその目は」

「・・・アンタねえ、校庭にいる女子を見て騒いでたの？
さすがにちよつと退くわ」

「李奈ちゃん・・・
校庭じゃないよ」

「えっ？」

「何でお前も祐介と綾香と同じで校庭しか見ないんだよ・・・」

「うつさいわね！

アンタが最初からそう言わないからでしょ！」

鈴木は再び外を見た

まさか、コイツまで祐介達と同じで校庭しか見ないとはなあ・・・

「ちよつと光治、”変態”の双眼鏡貸して」

「誰が”変態”だ！」

「」「あ、起きた」「」

気絶している祐介は”変態”という言葉に反応して起き上がった

「祐介、ちょっと双眼鏡貸して」

「何だ？お前ひよつとして女が好きなのか？」

「そんなわけないでしょ！

アタシは校門の方を見るだけで、アンタとは違うのよ！
とにかく、さっさと双眼鏡貸して！」

「分かった分かった、怒るなよ」

鈴木は祐介から双眼鏡を借りて、外を見た

「何か見えたか？」

「ちょっと待って

綾香ちゃん、ちょっとこれ見て」

鈴木が綾香に双眼鏡を渡した

綾香は双眼鏡越しで校門を見た

「凄いよ

校門の前にいる人達、皆ゾンビの様な肌の色してるよ」

「綾香、双眼鏡貸してくれ」

俺は綾香に渡された双眼鏡を通して校門を見た

確かに、祐介と綾香と三人で何回かはゾンビ映画を見た事があるか

ら分かる

校門の前にいる人達は灰色の肌をしていた

「アイツ等まるでゾンビじゃねえか」

「何だよ、俺にも見せてくれよ」

「ああ、良いぞ」

俺は祐介に双眼鏡を返した

そして祐介も双眼鏡で外を見た

「アンタ本当に校門の人達見てるの？」

鈴木は祐介が校庭の女子を見てると思っていたようだ

「失敬な！」

ちゃんと校門にいる灰色の肌の奴らを見てるからな」

「まあそんな事よりも、アイツ等は何なんだ？」

「そんな事よりって・・・（小声で）」

「ハロウィンかな？」

「「「いや、違いよ（違うから）（違うわよ）・・・」」」

綾香の言った事に俺達はつつこんだ

つか、天然にも限度だってあるからな

「あっ！」

「どうした鈴木？」

「校門の前にいた奴らが入って来たわ」

鈴木が校門の方に指を指している

校門の方を見ると奴らが入って来た

「何か嫌な予感がするな・・・」

「確かに、光治の勘は良く当たるからな、ホレッ」

祐介は双眼鏡を俺に渡してきた

そして、双眼鏡越しに奴らを追った

奴らはフラフラとした足取りで校庭に向かって歩いている

服はボロボロで口の周りは真っ赤になっている

全くこれじゃ季節外れのハロウィンだな、菓子でも貰いに来たのか？

そして黒川は奴らの所に走って行き、何か話している

すると奴らはいきなり黒川の首に噛み付いた

黒川の断末魔の悲鳴と女子達の悲鳴が混ざって学校中に響き渡った
皆が窓によって来て外を見ている

「な、何だよアレは！？」

「どうなってるの！？」

「黒川先生が喰われてる！！」

と皆が口々に叫ぶ

『現在、校内に不審者が侵入しています
生徒達は教職員の指示通りに行動してください
繰り返しします、な、何だ君は来るな！此方に来るな！
ギヤアアアア！』

放送室にいた教師が食われちゃった
たくっ！何が起きてるんだよ！

教師の叫び声がしてから2、3秒経つと、他の奴らは一斉に教室から走って出ていった

「な、何が起こってるんだ？」

「さ、さあ・・・」

「ちょっとヤバイよね・・・」

「バカ！早く逃げないとアタシ達も黒川先生みたい喰われるわよ！
！」

動転してた俺達を鈴木が正気に戻してくれた
そうだ、まずは此処から脱出しないと

「そうだな、今すぐ此処から逃げな」それは辞めとけ「っ！？」

扉の方から声がしたからその方に向くと、扉の前にシャツダラで第三ボタンまで外していてタバコをくわえている男、”坂崎隆二”がいた

要するに不良だ

隆二は俺達の方に歩いて来た
隆治が近付いてくると同時に、とてつもない威圧感も俺達に迫ってくる

「隆二、さっきのはどういう事？」

「言っただ通りの事だ
今は辞めた方が良いでしょう」

「あら、随分と優しい不良ね」

「うるせえクソ女」

鈴木は少し皮肉を込めて言った
それに対して隆二は舐めきった感じで鈴木に汚い言葉をはいた

こんなやり取りが出来るのは二人が幼馴染みだからであって、他の奴が隆二みたいな事を言ったら即あの世行き決定になってしまう

「なあ隆二、どういう事が教えてくれないか？」

「ああ、今校内の階段は自分優先の奴しかいないからな
我先にと逃げようとしてるから全く進めなくて、アイツ等が来る
そして上にいる奴は下にいる奴を落として何処かに逃げるといった
事が学校中で起こってるわけだ」

「じゃあ、このまま喰われろってわけか？」

「それ違うな祐介
誰も大人しく喰われるとはいってない」

「じゃあどうするの？」

「戦いながら逃げる」

「隆二、どういう事なの？」

「それは、アイツ等を倒してからだ」

扉から生徒が三人入って来た
だが、服はボロボロで身体中から血が流れていてその内一人は腸が見えている

「よしとりあえず倒すぞ、アイツ等は人なんて言える奴らじゃねえからな」

「じゃあゾンビって事？」

「そうだな」

よく分かってるな佐々木」

「隆二！どうやって戦うんだ！？」

「何でもいいから教室に有る物を使いえ！」

隆二は俺の机を持って、中に入ってる物を全部出した

「わかったよ」

俺は近くにある武器になりそうな物を探した
椅子と机しかねえ．．．

とりあえずさつきまで座ってた自分の椅子を持った

「よし行くぞ！

躊躇したら死ぬからな！」

「ああ！」

俺は隆二とゾンビの方へ向かった

2012年12月22日の今日、予言が現実になった俺は近くにある武器になりそうな物を探した

椅子と机しかねえ．．．

とりあえずさつきまで座ってた自分の椅子を持った

「よし行くぞ！

躊躇したら死ぬからな！」

「ああ！」

俺は隆二とゾンビの方へ向かった

2012年12月22日の今日、予言が現実になって人類滅亡へのカウントダウンが始まった

第1話 始まりなんて大抵どれも同じ様な感じ（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております

第2話 ソンビって何故か物凄い馬鹿力なんだよね（前書き）

一部、編集しました

第2話　ゾンビって何故か物凄い馬鹿力なんだよね

「オラァッ！」

ゴシヤッ！

隆二はゾンビの頭に机の足を叩き付けると頭蓋骨が碎けてその場に倒れた。

俺も続いて椅子の足でゾンビの顔を殴った。

グシヤッ！

という気持ち悪い音と感覚が身体中に響いた。

俺が一体倒した時に隆二は残りのゾンビを倒していた。

「ふう、まあこんな所か」

「やれやれ、周りの物を使って戦うなんてまるで”龍が如く”の様な」

とりあえず俺と隆二は一息ついた。

でも、いつまでも休んでるわけにはいかない。

「確かに良い例えだが、先を急いだ方が良いな」

「そうだな、三人共行くぞ」

「おっ」

「OK」

「ねえ、ちょっと寄ってほしい場所があるんだけど」

「「「「ん？」「」「」」

場所は変わって剣道場

鈴木が何か取りに行きたいと言ったから此処に来ている。

「お待たせ」

鈴木が戻って来た

そして手には・・・木刀だ！？似合い過ぎる

「な、何だその木刀は？」

「なによ、アタシが木刀使っちゃ悪いの？」

「いや、そうゆう訳じゃないんだが」

「ズルイよ！一人だけそんな強い武器使ってさ！」

祐介が鈴木の木刀にけちつけている

「しょうがないじゃない！

これ一本しか無いし、この中じゃアタシが一番こうゆう物に使い馴れているんだから！」

「確かに、李奈は剣道部だからこういった物を持ってた方が良い」

「諦める祐介」

俺は隆二に賛同した。

「諦めろって、俺は使いたいわけじゃねえよ」

「そんな事よりも、早く学校を出よう」

「隆二の言う通りだけど、武器が余りにも貧弱すぎるよな」

現在の武器

- ・机×1
- ・椅子×1
- ・木刀×1

「確かに、此处から出る前に強い武器を増やしたいなだが良いところを知ってる」

「隆二君、本当に？」

「ああ、アレなら佐々木も祐介も扱えるな」

「って事はそれまでは俺と綾香は丸腰か？」

「普通に考えてそうね」

「李奈ちゃん、絶対守ってよ」

「大丈夫よ、心配しないで」

とりあえず綾香は大丈夫だろう。
さて、祐介はどうするか。

「光治頼んだぞ！」

「ああ、お前はゾンビの餌係だから心配すんな」

「そうゆう事言っなよ！」

「光治、祐介行くぞ」「わりい、ほら行くぞエス・・・祐介」

「お前今、餌って言おうとしただろ！」

俺は祐介が言ってる事を無視しながら隆二についていった。

「ところで、何処に向かってんだ？」

「部室の鍵を取りに行くんだ」

はい、今のでだいたい分かってしまいました。
それにしても、さっきから何か聞こえる様な・・・

「やっぱりバットか!？」

「まあ、そんな所だ。良く分かったな」

祐介も気付いたか。

まあ、気付かない方がおかしいよな。

「何で分かったの？祐介君ってもしかして、エスパー？」

「綾香、普通は誰でも分かるからな」

「ええ！？そうなの？」

ゴメン綾香。分からない奴はおかしいと思った俺を許してくれ。

「ねえ、何か聞こえない？」

「急にどうしたんだ李奈？聞こえるのは、ゾンビのお決まりの呻き声と悲鳴くらいだが」

確かに隆二の言う通りでゾンビ達の呻き声と生存者達の悲鳴が聞こえるけど、それ以外にも何か聞こえる。

「確かに何か聞こえるな」

「光治も聞こえるの？」

「ああ、僅かにだけだな」

「それよりも先を急ごう。アイツ等もお出ましの様だからな」

隆二の向いてる方を見ると、5体のゾンビが此方に歩いて来てる。

「じゃあ早く部室の鍵を取りに行こうか」

「いや、それも無理そうだな」

死体と残骸が散乱してる階段を降りようとしたら、隆二に止められ

た。

「どうゆう事だ？」

「ああゆう事だよ」

「は？どうなってんだよ・・・」

そこには信じられない光景が写っていた。

階段にあるついさっきまで死んでいた人が起き上がっている。

「とりあえず上に行くぞ。みんな走れ」

隆二に言われた通りに俺達は一斉に上の階へと向かった。下ほどじやないが、やっぱり死体や残骸が転がっている。

「うおっ!？」

いきなり何か足を掴まれた。

俺の隣に倒れていた死体が甦ったらしく、俺の足にかぶりつこうとしている。

「「「光治（光治君）!」「」」

「クソッ! 離れやがれ!」

俺はゾンビの頭を何度も蹴り続けるが、全く動じない。

それに、何て馬鹿力何だコイツ!

ゾンビが俺の足に噛み付こうとした瞬間

グシャッ

と音がして、ゾンビは動かなくなった。
そして隣には木刀を持った鈴木がいた。

「ほら、早く行くわよバカ！」

「あ、ああ」

俺は足を掴んでいた死体を下の階に向けて蹴ってから、五階へと向かった。

五階は所々に血が飛び散っているけど、ゾンビも人の姿も見えない。
でもさつきからかすかに何かの音楽が聞こえる

「何だこの音は？」

「何かの音楽の样ね」

「吹奏楽部の部室から聞こえてくるな」

「光治何か心当たりないの？」

「鈴木、何故俺に聞いてくるんだ・・・」

「だって、アンタの周りには”変な奴”が多いじゃない」

「それは俺が”変な奴”ばっかとするんです”変な奴”って言いた
いのか？」

「別にそうゆう意味で言った訳じゃないわよ！」

「痴話喧嘩はよしてくれないか？」

このままだと、ヒートアップしそうと思ったのか隆二が間にはいった。

つか、痴話喧嘩って・・・

「ちょっと隆二！今の言い方だと、アタシと光治が夫婦みたいな言い方じゃない！」

「そんなのどうでも良いだろ。」

「アンタねえ、自分で今の状況を作つていてそれは無いでしょ！」

「ああ、それは悪かったけど、アイツ等に喰われる前に音がする所に行ってみよう
会話は移動しながらでも出来るからな」

確かに、階段には無数のゾンビが俺達との距離を少しづつ詰めていた

「そうだな。急ごう」

俺達は吹奏楽部室がある左の方に向かって走った。

「ねえ隆二君」

「何だ綾香？」

「音はゾンビ達を引き寄せるんだよ。何で音楽が聞こえてくる所に行くの？」

「生存者がいるかもしれないからだ」

「それは、助けるって事なの？」

「ああ」

「でも隆二、それはかなり危険じゃないのか？」

「確かに危険だが、逃げ道が無いから仕方ない」

後ろにはゾンビが俺達を追って来てるから後戻りは出来ない

「なら、右に行けばよかったんだよ」

「それは甘いな祐介。もし、右に行ったとしても今と同じ様になるだろうな」

「何か根拠があるのかよ」

「ああ、ゾンビ共は必ず全ての階にいるからな、教室に行く前は何度もゾンビに出会ったからな」

「じゃあ、俺と隆二が初めて倒したゾンビは」

「恐らく、追い掛けて来たんだろう」

「なるほどな」

「よし着いたぞ」

何だかんだ話してるとあつという間に吹奏楽部室前に着いた。
幸いにもゾンビはいなかった。

『California rest in peace
Simultaneous release...』

さっきから聞こえてたのはこの曲か．．

「此処で間違いないな」

「これってロックよね？」

「しかも海外のね」

「これは．．映画版デ。ノートの主題歌だよな」

海外のロックに聞き覚えのあるこの曲．．

「まさか！」

「どうしたの光治！？」

「祐介と綾香は誰だか分かるよな。」海外のロック”とこの曲で予想はつくだろ」

「「うん」」

俺達三人は普通に分かるが、隆二と鈴木は首をかしげている。

「間違いない、アイツだ・・・」

「音楽室にいる奴が誰か分かるのか？」

隆二が聞いてきた。

”海外のロック”から連想できる奴はアイツだけだから分かる。

「ああ」

「やっぱりアンタの知り合いじゃない」

「まさか、本当にアイツだったとはなあ・・・」

「お前の知り合いって事は中に入れてくれるかもしれないのか？」

「多分な」

俺は扉前まで来て取っ手を掴んで開けようとしたが開かない。
そして音楽が急に止まった

「どうだ？」

「中から鍵が掛けられてる」

「なら、名前を呼べばいいじゃない」

「今やるよ。」

おい吉彦、開けてくれ」

海外ロック好きの”アイツ”の名前を呼んだ。

「その声は光治か!？」

扉の向こうから男の声、つまり吉彦の声が聞こえてきた。

「ああ」

「お前一人だけか？」

「いや、俺以外に四人いる」

「誰も噛まれてないな!？」

「は?何言つてんだ？」

吉彦はいきなり意味不明な質問をしてきた。

「今言つた通りだ。誰もアイツ等に噛まれていないな？」

「ちよつと待つてろ」

俺はみんなの方に向いた。

「どうだった？」

隆二が聞いてくる。

「よく分からない質問をされたよ。」 誰もゾンビに噛まれてないか?」 ってな」

「どう言う意味だ？」

「さあな、勿論誰も噛まれてないよな？」

「当たり前でしょ」

「大丈夫だ」

「噛まれてないけど」

「大丈夫だよ」

鈴木、隆二、祐介、綾香の順で噛まれてないと答えた

「そうか．．．ってヤバイ！アイツ等がもうそこまで来てるぞ！」

後ろからゾンビ達が近付いて来ていて、あと数秒で俺達に追い付く距離になっていた。

俺は扉まで駆け寄った。

「誰も噛まれてない！噛まれてないから早く開ける！アイツ等がすぐそこまで来てる！」

俺は扉に何回も椅子を叩き付けながら叫んだ。

「分かった！今開ける」

「早くしろ！！」

俺は大声で叫んだ。

その後ろでは隆二が机を、鈴木が木刀で次々にゾンビを倒しているが、その後ろでは他のゾンビが少しずつ近付いて来ていた。

「おい！早くしないとブツ殺すぞ！！」

俺は怒鳴りながら鉄の部分が所々ひしゃげた椅子で扉を叩きまくった。

カチャッ

鍵が開いた音がして扉が開き、そこから吉彦が顔を出した。

「早く入れ！」

「遅えよクソ野郎」

「バリケードを張っていたんだよ」

「まあいい、みんな！早く入れ！」

俺がみんなを呼ぶと、皆は扉に駆け寄って来た

「早く！早く入れ！」

俺達が入ると吉彦は急いで扉を閉めた。

扉の向こう側では、無数のゾンビが扉を叩いている音が聞こえる。

「助かったよ吉彦」

俺は再び即席のバリケードを張っている吉彦に礼を言った。

「ああ、良いって事よ。疲れただろ？そこら辺でくつろいでてくれ」
「そうさせてもらつよ」

俺はひしゃげた椅子をその辺に置いてから部屋の真ん中まで歩いていき、そこで座った。室内には祐介や綾香達の他に男が2人、女が1人の計3人の男女がいる。見覚えの無い顔だから、恐らく後輩だろう。

それにしても、さつき椅子で叩きまくりながら怒鳴り散らしていたせいか、怯えている。

隆二はポケットからタバコとライターを取り出して、タバコに火を付けて吸っていて、祐介達は窓の付近で座っている。

即席バリケードを張り終えた吉彦が此方に近付いて来た

「しかし、剣道部の鈴木に此处等一体で最強の不良の隆二がいるとはな。お前は運が良いな」

「まあな」

「さてと、これからどうする？」

「そうだな・・・よし！決めた」

「何をだ？」

「なあ吉彦、皆を集めてくれ」

第2話 ソンビって何故か物凄い馬鹿力なんだよね（後書き）

御意見、御感想等お待ちします

第3話 自己紹介！それから・・・武器を集めよう！（前書き）

何か色々と変になっていたので直しました。
すいませんでした

第3話 自己紹介！それから・・・武器を集めよう！

今、吹奏楽部室の中央には皆が集まっている。

「なあ光治、皆を真ん中に集めたけどこれから何するんだ？」

吉彦が聞いてきた。

何でこの後の展開が分からないんだ？

「何って、今後どうするか会議に決まってるだろ。何で分からないんだ？」

「うるせえ！そんなのどうでも良いだろ！」

俺が何で分からないか聞くと吉彦は何故かキレた。

「なあ、これから何するんだ？」

祐介が聞いてきた。

まあ祐介なら分からないのが普通だから俺は気にしない。

「俺達は、これから共に行動するんだ。」

だから皆にはこれから自己紹介をしてもらおうと思ってる。皆はどう思う？」

俺は皆の前に立って、中央に集めた理由を話した。とは言っても、理由はあともう一つあるけど。

「確かにそうね。お互いの事を知らないと、この先何かしらの支障

がでると思うわ」

「李奈の言う通り、この先何かしらの支障をださない為にも互いを知った方が良いだろう」

隆二と鈴木は自己紹介に賛成した。

「他は？」

俺は残りの六人に聞いてみた。

「俺は別に良いぜ」

「私も良いよ」

「別に構わないぞ」

祐介、綾香、吉彦も賛成した。あとの三人も喋りはしなかったけど、頷いた。

「じゃあ、まずは俺からだな。」

俺は片岡光治、クラスは3年B組だ。ゾンビが現れた時は教室にいて、そこから綾香や隆二等と此処に逃げて来たんだ。よろしくな」

俺は知らない3人に自己紹介をした。

「じゃあ、次は祐介だ」

「オッケー」

俺は祐介がいた所に座って、祐介は俺がいた所に移動した。

「俺は佐藤祐介、光治と同じクラスの3年B組だ。ゾンビが現れた時は教室にいて、そこから光治達と一緒に此処に来たんだ。まあよろしくな」

「ちなみにコイツはゾンビの囃役だ」

「そうゆう事言っなよ！」

軽い(?)冗談を言ったら、祐介がツツコンできた。

「冗談だよ。」

次は綾香の番だな」

「え!？わ、私かあ．．．緊張するなあ．．．」

綾香はそう言いながら、前に立った。

「わ、私は、佐々木．．綾香．．です。

ク、クラスは．．光治君と祐介君と．．同じ3年B組．．です。ゾンビが、現れた時は．．教室に．．いて．．そこから光治君や隆二君に李奈ちゃん．．とい、一緒に此処に来ま．．した。

よ．．よろしくお願いします！」

綾香は緊張しながらも何とか自己紹介を終えて、お辞儀をした。しかし綾香の奴、あんな秘密兵器を隠してやがったのか．．．つい、カワイイと思ってしまった。

「次は鈴木の番だ」

「分かってるわよ、そんな事」

鈴木はそう言つて前に立つた。それにしても、相変わらずツンツンしてやがるな。

「鈴木李奈よ。」

剣道部主将でクラスはあの”バカ”と同じ3年B組でゾンビが発生した時は教室にいて”バカ”達と一緒に此処に来たわ。よろしくね。」

自己紹介で”バカ”つて言つた時だけ目線が何故か俺の方を向いていた。

まさか”バカ”つて俺の事か!?

「隆二の番だぞ」

「ああ」

隆二はタバコをくわえたまんまで前に立つた

「坂崎隆二だ。”フー”」

クラスは3年C組で、”フー”、ゾンビが現れた時は学校の屋上で寝てて、そこからアイツ等と合流して此処に来た。よろしく、”フー”（”フー”の所はタバコの煙を吐いている）」

アイツ寝てたんだ・・・

つか、タバコ吸いながら自己紹介するなよ・・・

「じゃあ次は、吉彦か」

「そうだな」

吉彦は前に立った。

そういえば、コイツは自己紹介の時、色々と面倒なんだよなあ・・・
適当な所で終わらせるか。

「田中吉彦だ。

クラスは隆二と同じ3年C組でゾンビが現れた時は教室にいて、そこから此処に逃げて来たんだ。

ちなみに、俺が好きなバンド「お前が」レッ。リ” 大好きなのは、
充分分かってるからそこから先は言わなくていいぞ」なっ!？」

やっぱりこうなった。

1年の時も自己紹介が長くて担任に強制終了させられてたなあ・・・
吉彦は、”レッ。〇。ット。〇。リペッ。ーズ”というバンドが大好きで、
その中でもベース担当の”フ。ー”とかいう奴に憧れてるそう
うだ。

「おい！何で自己紹介の途中で終わらせるんだよ！！」

「テメエが自己紹介する度に”レッ。リ”の事を話だして長くなる
からに決まってるんだろ！！」

吉彦が怒鳴ってきたから、俺は吉彦に怒鳴り返した。

「ちょっと！アンタ達が怒鳴るからあの子達が怯えてるじゃない！」

「あ・ああ、すまない。」

「全く、この先の事に何かしらの支障が出たらどうすんのよ」

「おやおや、妻の尻に敷かれて」「だから夫婦じゃねえ！（じゃないわよ！）」「ゴブアツ！！」

吉彦が調子に乗った為、鈴木がアイツの腹を蹴って、俺は顔面に右ストレートをおみまいすると、吉彦は少し吹っ飛んでそのまま気絶した。

「何で、俺がこんな女と夫婦なんだ（私がこんなのと夫婦なのよ）
．．．あつ！！」

俺と鈴木はあの３人の方に向いた。

ああ、やっぱりな．．．メツチャビビってるよ．．．今近付いたら、パニックに陥るかもな．．．

「なあ綾香、頼みがあるんだが」

「何？」

「俺の代わりに進めてくれないか？」

「どうして？」

「何でってなあ．．．」

吹奏楽部前では扉を椅子で叩きながら怒鳴って、室内じゃ、吉彦と怒鳴りあつた上に、殴って気絶させちまったからアイツ等の危険順位が

１．俺

2 ・ 鈴木

3 ・ ゾンビ

4 ・ 隆二

5 ・ 吉彦

って感じになってると思うんだ。だから今俺が話し掛けてもなあ・
」

「分かった、私に任せて」

綾香はそう言っで胸を叩いた。

「すまない、助かるよ」

「良いよ、気にしないで」

俺が申し訳なさそうにそう言っで綾香は笑顔でそう答えた。

「あ、ああ・・・／＼」

俺はつい顔をそらしてしまっだ。

やべえ・・・あの自己紹介のせいで、アイツが笑顔になっただけで
「カワイイ」って勝手に認識してやがる。目を覚ませ！目を覚ます
んだ俺！！

「大丈夫？何か顔赤いよ」

「だっ、大丈夫だ。

そ、それより頼んだぞ」

綾香が心配した様子で聞いてきたから、俺は慌てて答えた。

「任せといて」

綾香はそう答えてウインクをした。

（やめろおおおお！！）

精神が不安定な時にそうゆう事すんじゃないやねえええ！！）

俺は心の中で叫んだ。

「ねえ！

自己紹介、次は君達の番だよ。教えてよ君達の名前とクラスとゾンビが現れた時に何処にいたか教えてよ」

綾香は怯えてる3人を呼んだ。

すると3人は俺達に聞こえない位の声で話し合いを始めた。

「全く、アンタが怖がらせたからよ」

「いや、正確には俺とお前が怖がらせたんだからな。そこんとこ忘れんなよ」

俺は鈴木が言った事の間違いを訂正した。

「それは、アンタがあゝ”変人”の自己紹介を強制終了させたからでしょ！違う？」

「あのな、吉彦の自己紹介を放置してると二、三時間位”レッ。リ”の事を話続けるんだぞ。お前はそれを耐えられるか？」

「それは、さすがに無理ね。止めて正解だったわね」

鈴木が気絶してる吉彦に指を指しながら理不尽な事を言ってきたから、俺は吉彦の自己紹介を強制終了した理由を説明すると納得してくれた。

「おいその”夫婦”、あの三人が待ってるぞ」

隆二が今さっきまで怯えて三人が”話していいですか？”オーラ全開でこっち見て待ってる事を教えてくれた・・・って今、”夫婦”って言いやがったな。

「だから、夫婦じゃねえ（じゃないわよ）！！」

と俺と鈴木は隆二に同じタイミングで同じ事を言った。

「そんな事より、アイツ等待ってんぞ」

隆二は三人の方に指を指しながらそう言った。

「悪かったな。自己紹介してくれ」

俺がそう言つと三人は一瞬ビクツとしてから

「は・・・はい・・・」

と言った。

そして三人の中の内、一人の男が前に出た。

「ぼ、僕は．．宮本．．幸助です．．．。クラスは．．1年A組で．．ゾンビが現れた時は．．教室にいて、そこから．．一人で此処に逃げて．．きました。よろしく願います．．．」

幸助と名乗った男は怯えた様子で自己紹介をした。やっぱり、短時間で沢山の恐怖を体験したからなあ．．．次は幸助とは違う男が前に出た。

「安岡光太です．．．」

クラスは2年A組で．．ゾンビが現れた時は．．教室にいて、そこから彼女と此処に逃げてきました。よ、よろしく願います」

光太と名乗った男が後ろにいる女を指しながら自己紹介をした。この光太って奴は、さっきの幸助ほど、怯えてはいないな。

さてと、あと一人は．．．めっちゃモジモジしてるよ、大丈夫なのか？

すると、その娘は光太の隣に移動してから耳元で何か囁いている。それが終わると光太が口を開いた。

「彼女は古林葵です。僕の彼女でクラスは僕と同じ2年A組でゾンビが現れた時は教室にいて、そこから此処に逃げてきました。」

が光太が代わりに彼女の自己紹介をした。しかもリア充かよ、爆発しやがれ！．．．と言いたい所だが、今はそんな事言ってられない程の事態だから我慢しよう。

「なあ光治、これからどうすんだ？」

と祐介が聞いてきた。

確かに、この先どうするかな・・・

吉彦が気絶してるから作戦会議は無理だからなあ・・・そうだ。

「そうだな・・・とりあえず武器になりそうな物でも探すか」

と俺は祐介の質問に答えた。

人数が多くなつたから、武器が少ないと半分位に減る可能性があるから今はとりあえず武器になりそうな物を探すか。

「じゃあこれから、皆で武器になりそうな物を探すぞ。いいな？」

「『『『『『『『ああ（ええ）（はい）！』『』『』『』『』」

俺の問いかけに気絶している吉彦を除く全員が返事をした。

↓十分後↓

「まあ、こんなもんかな」

と俺は言った。

此処にある全ての物を”10”として、武器になりそうな物は”10分の1か2”位だが、それでも良い収穫だ。

収穫は

ギター×5

机・・・沢山

椅子・・・沢山

ベース×1（何であるの？）

といった所だ。

「で、どれを持っていくんだ？」

「そうだな．．．ギターは机や椅子より壊れやすいけど使いやす
いから３つ位は持っていていくかな」

隆二が聞いてきたから俺はそう答えた。

「じゃあ、机と椅子はどうすんだ？」

今度は祐介が聞いてきた。

「適当に分けるよ」

と俺は面倒くさいから適当に答えた。

「おいおい．．．適当だな」

「机と椅子なんて学校中に沢山あるからどうだっていいだろ」

「まあ、確かにそうだけど．．．」

「うつ．．．うつ．．．」

俺と祐介がどうしても良いやり取りをしてると、吉彦が目を覚ました。
つか、気絶から覚めるの早いだろ。

「うつ．．．此処は？．．．つか、何で鼻が痛いんだ？」

吉彦は自分が気絶する前の事を覚えてないのか？
まあ、それはそれ俺にとっては都合が良いけど．．．

「あ！そうだ。光治デメエ！よくも俺の顔面殴りやがったな！それに、鈴木も俺の腹を蹴りやがって！」

やっぱり覚えてたか．．．さすがに、そう都合良くいかないよ。

「アレは、俺と鈴木の前で”禁句”を言ったお前が悪い」

「そうよ、アンタがアタシと光治の事を、ふっ、ふっ、夫．．婦って言ったのが悪いのよ」

俺が言った事に鈴木も賛同した。

”夫婦”って所は別に無理して言わなくても良いと思うが．．．

「それは、お前が俺の自己紹介を強制終了したから、俺が”禁句”を言うはめになったんだろうが」

吉彦はあまりにも理不尽な事を言ってきた。

「結局、八つ当たりかよ」

「最低ね」

俺と鈴木は吉彦に冷たい視線を浴びせた。

「それよりも、今何やってんだ？」

と吉彦はいきなり話題を変えてきた。
「どんな事を言われても”知るかボケ！”って訳かよ、まあ吉彦らしいな。」

「今は武器を集め終えた所だ」

俺は吉彦の質問に答えた。
。

「武器つて・・・机と椅子ばかりだな、それとギターが少しつて、大丈夫なのか？」

「知らねえよ！」

俺は吉彦が言つた事に若干苛ついた。
この野郎、今度は気絶じゃなくて殺してやろうか？

「俺には、そんなギターよりも強力な・・・つて、何で俺のベースが他のギターと一緒に置いてあるんだ！？」

「だって、武器になりそうな物は真ん中に置いてくれと言つたんだが、聞いてなかったのか？」

「聞ける訳ねえだろ！
気絶してたんだぞ。そんな分かりきつた事を聞くんじゃないよ！」

「アンタ達、それはどうでも良いから作戦会議しましょうよ」

鈴木は長引くと思つたのか、俺と吉彦のやり取りの間に入って止めた。

「そうだな、じゃあこれから作戦会議を始めろ」

俺は皆に聞こえる様にそう言つた。

第3話 自己紹介！それから・・・武器を集めよう！（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております

第4話 作戦会議！そして作戦決行！（前書き）

色々な事で遅れました

第4話 作戦会議！そして作戦決行！

「じゃあこれから作戦会議を始めるぞ」

俺は皆に聞こえる様に言った。

「作戦会議？」

吉彦が首をかしげた。

「まあ、作戦と言うよりは、どうやって学校から脱出するかだけだな」

「何でそんな面倒くさい事をしなきゃいけないんだ」

吉彦が面倒くさいと言いやがった。

「じゃあお前は、あのバリケードを外して扉を開けて、わざわざ外にいるゾンビに自分の肉を捧げるのか？」

俺は即席のバリケードが張られている扉を指しながら、吉彦に皮肉を込めながらそう言った。

「うつ！そ、それは・・・」

「ほらな、やっぱり何も考えていない。お前みたいな奴や誰も死なせない為に作戦会議をするんだ。分かったな？」

「あ、ああ」

俺は何も分かっていない吉彦に作戦会議をする理由を説明すると、吉彦は頷いた。

「会議の議題は」どうやって学校から脱出するか」だ」

俺は作戦会議の議題を発表した。

「なあ、どうやってこの学校から脱出するんだ？」

「それを、これから話し合っただろ。つか、何でお前は人の話を聞かないんだよ・・・」

人の話を聞かない”アホ”の祐介の質問に俺は呆れながら答えた。

「じゃあ早くやろうぜ」

と祐介が言った。

何だよその態度は、何様だよお前は・・・

「まあいい、じゃあこれから、”どうやって学校から脱出するか”の案を出してくれ。」

案を出す時は手を挙げてからにしてくれ」

俺は皆にそう言った。

すると吉彦が手を挙げた。

「扉が駄目なら、窓から出れば良いと思うんだけど」

吉彦は案を出した。

「なるほどな。で、詳細は？」

俺は吉彦の出した案の詳細を聞いてみた。

何故なら、脱出するのだから詳しい詳細を聞かないと色々危険な事になるかもしれないからだ。

詳細があまりにも無謀すぎるのも困るのも理由の一つだ。

例えるなら、いきなり「バ。オハ。ード？でミ。・ジヨ。ビ。チの様に建物の壁をかけ降りろ」と言われた様なものだ。

あの技は俳優でさえ難易度が非常に高いだろう。それを俺達高校生が出来ると思うか？勿論無理だ。そうゆうアホみたいな案を出されては困るから俺は詳細を聞くんだ。

詳細があまりにも無謀過ぎる内容だったら、俺は即却下する。

「其処にあるカーテンをロープ代わりにして下の階に降りるんだ。確か下はコンピュータールームだったから色々と情報を集められるからな」

と吉彦はカーテンを指しながら、自分が出した案の詳細を話した。

「おお、吉彦にしてはまともな案が出たな」

俺は意外とまともな案を出した吉彦に驚いた。

「お前は一体俺をどう見てるんだ？」

「そんなの、レッ。リ大好きで出来もしない事を出来ると信じてる空想野郎だろ？」

カーテンを使って校舎の壁をかけ降りるとかいうバカげた案だと思

「っただけだなあ・・・」

「く、空想・・・野郎・・・」

俺は吉彦のイメージを言うとアイツはひどく落ち込んでいた。

「アンタって、さりげなく最低な事言うのね」

「しょうがねえよ。光治は毒舌だからな」

「光治君って中1の時から毒舌になったんだよね」

鈴木が俺に軽蔑の視線を浴びせながらそう言うのと祐介と綾香も賛同した。

さすがに、これだけは自分も否定出来ない事だ。

「吉彦、さっきのは悪かった。」

「あ、ああ気にすんな」

俺が謝ると吉彦は許してくれたけど・・・物凄い落ち込んでいる。

「じゃあ会議の続きをやるぞ」

俺は会議を続ける事にした。何故なら吉彦を立ち直らせる事も大事だけどそれは会議が終わった後でも出来るから俺は会議を進める。

「じゃあ、カーテンを利用して下の階のコンピュータールームに行くという案に対して何か不満がある奴はいるか？」

俺が皆に聞くと、鈴木が手を挙げた。

「なんだ？」

「確かにカーテンで下の階に行くのは良い案だけど、下に行くときは武器が持てない筈よ、下に行った人はどうやって武器を受け取るの？それにもしも中にゾンビが居たらどうするの？」

確かに鈴木と言う事は納得出来る、下の階に行けても武器を受け取る方法が無ければ丸腰で脱出しないといけないし中にゾンビがいたら武器を受け取る前に食い殺されるだろう。

「じゃあお前が最初に行く事になるな」

「ええっ！？な、何でアタシが最初に行かないといけないの！？」

俺がそう言うつと鈴木は驚きながら聞いてきた。

「だってお前は木刀を持っていて、ソレを腰とかにさせるだろ？」

と俺は理由を言った。

勿論ふざけているわけじゃない。武器を携帯出来るという事は下に降りて武器を受け取ってる時にゾンビに喰われないという事だ。

「だからって何でアタシが、戦闘のプロの隆二とか木刀を持たせて行かれれば良いじゃない」

「戦闘のプロって、俺は何時から戦闘員になったんだ・・・（小声）」

鈴木は自分一人で行く事に納得出来ないのか反論してくる。
隆二が小声で何か呟いているが今はそれどころじゃない。

さてと．．．どうやって納得させるかな．．．言葉だけじゃ納得し
なだろうしなあ．．．

そうだ！色々な意味で危険かもしれないけどやるしかない！

「分かった、なら俺も一緒に行こう」

「『はあ！？（ええっ！？）』『』『』」

俺が言った事に祐介、吉彦、綾香、と鈴木本人が驚いた。

いつも鈴木と”夫婦”と言われるのが嫌いな俺が鈴木と二人で行動
するなんて普通は思わないだろうな。俺だって正直嫌だけど、今は
時間が限られているから我慢してやった事だ。
つか、吉彦の奴いつの間にか立ち直ってるし。

「な、なな、何でアンタがアタシとい、一緒に．．．？」

鈴木はやっぱり動転している。

まずいな、このままだと足手まといになっちまうな．．．、やっぱ
り変な方向に進んでいくよなあ．．．仕方ない！

俺は鈴木目の前に来て彼女の肩に手を置いた

「なあ鈴木」

「は、はい！、な、何ですか！？」

俺が呼ぶと鈴木は返事をした。何故に敬語？

「いいか、俺は必ずお前をゾンビの餌にはさせない。俺がお前を守るから」

と俺は言った。

鈴木は顔を真っ赤にして下を向いた。

正直に言う、死にたい位恥ずかしい。穴があつたら入って生き埋めになりたい位恥ずかしい。

何で！？あんな格好付けた事を言っただけで恥ずかしいと思つて決まってるだろ！！

鈴木はしばらく下を向いたままだったけど、少しだけ顔を上げて上目遣いながらも

「も、もしアタシが・・・噛まれたら・・・あ、アンタも一緒にみ、道連れだからね・・・／／」

「グバアッ！！」

と顔を赤らめながら言った。

そして、俺と祐介と吉彦は口から血を吐いて倒れた。すぐ近くでは隆二が”面白そう”と言つてゐるような顔をしてた。

「ちょ、ちよつと大丈夫なの！？」

と鈴木が俺に駆け寄つて来て言った。

「あ、ああ大丈夫だ。

まあ、約束は守るさ」

「そ、そう・・・」

約束ちゃんと守ってよね」

俺は口の血を拭いながら答えると、鈴木はまた何時ものようにツンツンしだした。

しかし、アイツにあんな秘密兵器を隠していたなんて・・・しかも自己紹介の時の綾香より強力だ・・・

ツンデレってのは時に恐ろしい程の破壊力があるのか・・・

祐介と吉彦は綾香が診てるから大丈夫だな。

「じゃあ次は、武器をどうやって運び出すかだ。何か案がある奴は？」

俺は皆に聞いてみたけど誰も手を挙げない。

まあ、手が挙がらないのは普通だな。武器を運び出すかというからにはミスってしまうと丸腰状態になってしまうから、ちゃんとした案を出すために考えてるんだろう。しばらくすると

「一つだけ案がある」

と隆二が手を挙げてそう言った。

「何だ？」

「なに簡単な事だ。

誰かが武器を落として下の階にいる奴がソレをキャッチするんだ」

隆二は俺を見ながらそう言った。

「なるほど、じゃあ誰がソレをやるんだ？」

俺が聞くと、皆が一斉に此方を見た。

「……………お、俺!？」

「「当たり前だろ」」

俺が驚くと吉彦と祐介がそう言ってきた。

恐らく、コレは俺が何言ったって無駄なんだろうなあ……………

「…………ハア、分かったよ。俺に拒否権は無いんだろ? やってやるよ」

俺は諦めてそう言った。

「じゃあ、さっさと始めるぞ。光治、さっさとしろ」

「ああ…………って、何で隆二が指揮ってるんだよ」

「万が一の為だよ」

俺が聞くと、隆二が縁起が悪い事を言ってきた。がった。

「ったく…………まあ良いか、鈴木早く準備s「光治、早くしなさいよ」って早!」

俺は鈴木に”早く準備しろ”と言おうとしたら、既に準備していて逆に言われたから、俺もすぐに準備をした。

「じゃあ行くか」

「そうね」

俺はギターを片手に鈴木と窓に向かった。
カーテンを外そうとしたら、いつの間にか外されていた。

「あれ、誰がカーテンを外したんだ？」

「僕が外しました」

「おおそうか、ありがとな」

どうやら、幸助が外したらしいから俺は礼を言った。

「じゃあ、今度こそ行くか」

「そうね、今度こそ」

第4話 作戦会議！そして作戦決行！（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております

キャラクター紹介（前書き）

2011.12.10
一部追加、編集しました

キャラクター紹介

・片岡光治

（かたおかこうじ）

八王子高校3年B組

黒髪で若干目にかかる位でちょっとつり目顔は中の上

毒舌で主にツツコミ役

オカルト系大好きの祐介と綾香のせいで、授業の合間は新鮮な空気を吸うために廊下に出ている。

本人曰く、「祐介と綾香とはただのクサレ縁」。

李奈との夫婦疑惑（？）のせいで色々と悩んでいる為、李奈と二人の前では”夫婦”は禁句になっている（言つと顔面に渾身の右ストレートを放つ）。

ゾンビが現れてからは成り行きで、いつの間にかリーダーになっている

ファーストキスの相手は生徒会長の楓とで、ゾンビ発生の前日には、いつの間にか婚姻届を出されていて、楓と夫婦になっている
昔、両親を交通事故で亡くしている

武器

椅子↓ギター↓バット

・佐藤祐介

（さとうゆうすけ）

八王子高校3年B組

茶色がかつた短い黒髪をしていて顔は普通

一応ゾンビの囷役

オカルト系が大好きで綾香と共に光治を色々悩ませている。

自前の双眼鏡でグラウンドにいる体操服姿の女子生徒を覗いていて、

教師達の悩みの種になっていた。

何回か光治と李奈の前で”禁句”を言ってしまった、殴られた事がある

武器

無し↓椅子↓バット

・佐々木綾香

（ささきあやか）

八王子高校3年B組

黒のショートヘアで顔は上の中

若干天然

祐介と同じでオカルト系

が大好きで二人で光治を悩ませている。

恥ずかしがりやで、人前で立って発表したりするのが苦手（光治曰く「つい”カワイイ”と思ってしまう」）

武器

今のところ無し

・鈴木李奈

（すずきりな）

八王子高校3年B組

黒髪のロングで顔は上の中

剣道部主将でツンデレ

隆二とは幼馴染み

光治との”夫婦疑惑”に悩まされている。

生徒会元副会長で楓とは知り合い

武器

木刀

・坂本隆二

（さかもとりゆうじ）

八王子高校3年C組

金髪で顔は中の上で非常に目付きが悪い

不良

いつも授業をサボって学校屋上で寝ているかタバコを吸っている。

校外ではよく他校の不良に喧嘩を売られて、その度にボコボコにしている。

此処等いったいでは最凶の不良だが学校内では不祥事はあまり起こさない。

武器

机↓ギター↓バット

・田中吉彦

（たなかよしひこ）

八王子高校3年C組

全てにおいて普通

レッ。リ大好きでベースのフ。ーに憧れている。

自己紹介では必ずレッ。リの事が出てきて、放っておくと2、3時間間は話続ける。

何回か光治と李奈の前で”禁句”を言ってしまい、殴られた事がある。

武器

ベース

・宮本幸助

（みやもとこうすけ）

八王子高校1年A組

黒髪のスーツ刈りで顔は普通

弱気な性格で自己紹介の時などは光治と李奈を（特に光治の方）とも恐れていた。

脱出直前でゾンビの餌食となり死亡

武器

無し↓椅子↓バット

・安岡光太

（やすおかこうた）

八王子高校2年A組

短い黒髪で顔は中の上

同学年の葵とは恋人関係にあつて、葵の自己紹介の時は彼女に変わって紹介をした。

武器

無し↓椅子↓バット

・古林葵

（こばやしあおい）

八王子高校2年A組

黒髪のロングとショートの中間で顔は中の上

光太とは恋人関係にある。

あまり他人とは話さない性格な為、彼に自分の紹介をしてもらった。

楓と光治を羨ましがっている（夫婦だから）

武器

今のところ無し

・吉田楓「片岡楓」

（よしだかえで「かたおかかえで」）

八王子高校の3年A組

黒髪のロングで学校一の美人

元生徒会長であり、学年首席の頭脳を持っていて、もつと上の高校からの推薦を受けていたが、光治と同じ学校に行きたいという理由で推薦を蹴って彼と同じ高校の入試をうけた

中学2年の時に光治達がいる中学に転校してきて、其処で彼に一目惚れして皆の前でキスをして「結婚してくれ」と告白した

それ以来、修学旅行や光治の自宅で夜中に侵入して全裸で彼の布団に入り込んで朝まで寝てたりしている

ゾンビ発生の前日に勝手に光治の家の印鑑を盗んで、勝手に婚姻届を出して夫婦になっている為、実際には”吉田楓”ではなく”片岡楓”となる

武器

バット

・北斗麻樹奈

（ほくとまきな）

学校から出た光治達が偶然神社で出会った女性

大和撫子の様な人

神社は彼女の家で、道場もありかなり広い

普段は穏やかだが、怒らせると辺り一体に絶対零度の空気で包み込み光治達一行を恐がらせる（隆二は除く）

「ついていきたくなくなった」という理由で光治達と一緒に行動することになった

光治達と出会うまでゾンビの事は何も知らなかった

武器

刀

第5話 夫婦になれるのは女性は16歳、男性は18歳になってから（前書き）

先に言っておきますが、あともう一話まではゾンビは出ないと思います。

あと、PVが1000を越えてました。

こんなので読んでくださって、ありがとうございます。

第5話 夫婦になれるのは女性は16歳、男性は18歳になってから

今俺は鈴木とコンピュータールーム（以下”CP室”）のベランダに降りて来た所だ。

「じゃあぶっ壊してくれよ」

「ええそだね、任せといて・・・って何で鍵がかかってるのが前提なの!？」

おお、ノリツツコミか。鈴木も成長したんだな。

「冗談だよ。ちゃんと鍵がかかってるか調べるから」

俺はそう言って窓に鍵がかかっているのか調べた。幸いにも鍵がかかってないらしいから窓を開けた。

「よし、入るぞ」

「ええ」

そして俺と鈴木は中に入った。

「こ、これは・・・うっ!」

「酷いわね・・・」

と俺と鈴木は口を押さえながら呟いた。
中にはゾンビは居なくて、あちらこちらに死体が転がっていてどれ

も頭を潰されていてグロテスクな光景が広がっていた。
恐らく、もう此処にはゾンビはいないだろう。

「この光景を除けば大丈夫そうだな」

「ええ、じゃあ早く上の皆を呼んできて」

「分かったよ」

俺はグロい死体だらけのＣＰ室に鈴木一人を残して、ベランダに出た。

上から隆二が顔を出していたから俺はＯＫサインをだすと隆二は頷いてから顔を引っ込めた。

それから、隆二以外がベランダからＣＰ室に降りて来た後、俺は隆二が落としてきた武器をなんとか全てキャッチした。

そして隆二が降りてきてから全員がＣＰ室に居ることを確認してから、窓を閉めて鍵をかけた。

「しかし、酷えなコレは・・・」

「まったく、気持ち悪すぎる・・・」

「吐き気がするな・・・あつ、もうムリ・・・ヴェエエエ」

隆二、祐介、吉彦の順に呟いて、そして最期に吉彦が吐いた・・・
つて、あのバカ！掃除するのに（死体や床に落ちている脳や肉片等を部屋の隅に寄せるだけだが）何ゲ。を追加してるんだよ！

「とりあえず、死体とかを部屋の隅に動かすぞ。」

吉彦は自分のゲ。もかたせよ」

「あ、ああ・・・」

吉彦は蒼白い顔で答えた。

「じゃあ、女性陣はそこら辺で休んでてくれ」

「うん、分かった」

「そうね、さすがに疲れたわ。
じゃあ頼んだわよ」

「・・・コクッ」

綾香、鈴木、はそう言って、2年の葵は頷いて死体掃除の邪魔にならない所に移動した。

「よし、じゃあ始めるか幸助と光太はあまり無理するなよ」

「「はい、でも、やれるだけやってみます（無理しない程度に頑張ります）から大丈夫です」」

お、なかなか良い返事だな。あの祐介と吉彦のバカコンビとは比べ物にならないな。

「そっか、じゃあ始めるかな。
祐介、吉彦、サボるなよ？」

「「何で俺だけ!？」」

祐介と吉彦が驚いていたが、俺達は無視して死体掃除を始めた。

「さてと、まずはアレからにするか」

俺は一番近くにある壁に寄り掛かっている女性の死体に近付いた。
近くにはバットが転がっていた。

「おっ、バットか後でもらっておこうかな」

と小声で言い俺は死体を担いだ。すると

「スー……スー……」

と静かに寝息を立てていた。

「生き残ったのか……」

俺はそう呟いてからゆっくりと女性を床に降ろした。

「皆来てくれ、生き残りが居たぞ」

俺は皆を呼んだ。

すると皆が此方に来た。

「アンタ、まさか変な事してないでしょうね」

鈴木がいきなり、とんでもない事を言ってきた。

「してねえよ！何で真っ先に変態に言うような事を言っんだお前は」

と俺が言つと

「誰が変態だ！」

祐介が反応した。

「お前は”変態” って言葉が出る度に出てくるな！」

俺は祐介を黙らせた。

「その娘、噛まれてるかもしれないから、一応起こした方が良く
思うぞ」

「そうだな」

隆二に言われた通りに俺は眠っている女性を起こすために揺すりな
から

「おい起きろ、大丈夫か」

と呼び掛けると

「うつ・・・うつ・・・」

「おお、起きたか。

どこか怪我はないかってうお!？」

起きたと思つたらいきなり女性はいきなり俺を掴んで引き寄せた。
今は誰も武器を持っていない。

クソッ！ここまでか！

俺は噛まれる事を覚悟した。

・・・？

何時まで経っても激痛がはしらない。

それどころか・・・何だ？この唇に伝わるこの感触は？

ゆっくりと目を開けると、そこには女性の顔が目の前にあった。

「！？」

俺は驚いて直ぐに女性から離れた。

周りには、いきなりの事で驚いている皆がいた。特に、鈴木と綾香は顔を真っ赤にしていた。

「な、何だ！？何があつたんだ！？」

俺は皆に聞く。

「な、何って、アンタ本当にわからないの？」

顔を真っ赤にした鈴木が逆に聞いてきた。

「あ、ああ」

「何だ？私達は夫婦だぞ。アレくらい普通だろ？」

俺が答えると女性の声がした。

その声の主は、さっきまで眠っていた女性だった。

「・・・か、楓（楓ちゃん）！？」「」

「会長!？」

俺と祐介と綾香と鈴木は驚いた。

あつ、そういえば、鈴木は生徒会副会長だったな。

「久しぶりだな友人達、そして私の最愛の夫」

「おい、俺が何時お前と夫婦になったんだ？」

「おい!ちよつとまて!」

吉彦が何か興奮しているようだ。

「どうした？」

「どうしたと!？何でお前が生徒会長とキスしてんだ!？」

俺が聞くと吉彦は若干キレていた。

って、さっきの感触はキスだったのか!？

「当たり前だろ?何故なら私と光治は夫婦なんだ。キス位は普通じゃないのか？」

楓は俺の腕に抱きついて勝手に魅せつけている。

つか、胸が当たってるんですけど・・・

「ふ、夫婦だと・・・

光治デメエ!両手に女を羽生らかせやがって!」

「俺は誰とも付き合ってねえよ！勝手な誤解すんじゃない」

俺はなんとか誤解を解こうと必死になっている。
だが、その横で

「何を言ってるんだ光治は。」

この前の修学旅行で朝まであんな事をした間柄だろ？」

と楓がまた変な事を言ってきた。

「アレはお前が勝手に俺の布団に潜り込んでたんだろ？！つか、あの時俺に何してたんだ！？」

「自分でやっておきながら光治は何を言ってるんだ」

おい、俺は何もしてねえぞ・・・

「へえ、やっぱりアンタって変態だったのね」

鈴木が微笑みながら（勿論目は笑っていない）木刀を構えてきた。
クソッ！もう我慢の限界だ・・・

「楓！いい加減にしろ！」

「っ！」

俺は我慢の限界にきて壁に叩き付けた。
楓は叩き付けられて顔をひきつらせた。

「わ、わりい楓、ついカツとなって」

俺は自分のしたことに気付いて、直ぐに謝った。

「いいんだ。夜まで待てなかったんだろ？気にするな」

良かった。気にしてないのか・・・って

「違えよ！何が「夜まで待てなかったんだろ？」だよ！」

「なあ光治、詳しく聞かせてもらおうかな？」

「そうね、アタシも色々知りたいし」

吉彦と鈴木がそれぞれベースと木刀を構えながら歩み寄って来た。

「分かった、話すから武器を下ろせ！」

俺が全てを話す約束をすると、二人は武器を下ろした。
噛まれてもないのに頭を潰されるのは御免だからな。

「よし、じゃあ早く話せ」

「洗いざらい、吐いてもらうわよ」

「ああ分かったよ、あつ、その前に・・・楓、どこか噛まれてないか？」

俺は過去を話す前に楓に噛まれてないか聞いた。

「ああ、今日も夢で光治に軽く首を噛まれたな」

「夢の話じゃなくて現実だ！」

何時もどんな夢を見てるんだコイツは。

「ああそつちか・・・大丈夫だ誰にも噛まれていない」

楓は何故かちよつと残念そうに答えた。

「本当に噛まれてないな？」

一応俺はもう一度聞いてみた。

前に祐介に無理矢理見せられたゾンビ映画で噛まれてないと嘘をついてた奴がいた事を思い出した。

「誰にも噛まれてないと言っただろ。お前は私を信用できないのか？」

「いや、念のためだ」

「なら、私が全裸になって噛まれてないと証明しようか？」

「もう良いよ」

俺は呆れながら答えた。

「さてと、じゃあ話すかな。楓と出会ったのは、中2の時だ」

俺は楓と初めて出会った時、つまり、全ての始まりの事を話した。

〓 中学2年の春〓

「吉田楓だ。」

茨城から此処に転校してきた。よろしく」

と転校生が自己紹介をした。つか、さっきから此方の方ばかり見てるな・・・

すると後ろに座っていた男、祐介が肩を叩いてきたから俺は振り向いた。

「なあ光治あの転校生、絶対俺の事見てるぞ」

いきなり何を言ってるんだコイツは・・・

「あつそう、良かったな」

俺はそう言って前を向いた。

確かにあの転校生は此方の方ばかり見てるけど、祐介はまず無いな。

「では吉田はあそこの空いてる席に座れ」

と担任が空いてる席を指しながら言った。

すると転校生はいきなり担任の手を遮って

「いえ、良いです」

と言って俺の隣に座っている女子生徒の前に立った。

「すまないが、私にその席を譲ってほしい」

と頼んだ。

コイツ、何考えているんだ？

「は、はい」

「そうか、ありがとう」

女子生徒がはいと答えると転校生はニコリと微笑んで礼を言った。そして、女子生徒が空いてる席に移動すると転校生はバックを椅子に置いて今度は俺の前に来た。

「何だ？」

「お前、名前は？」

「片岡光治だ」

名前を聞いてきた為、とりあえず名乗ると転校生はいきなり両手で俺の顔を軽く掴んで一気に引き寄せてきた。

「うおっ!？」

いきなりの事で俺は何もできなかった。

すると、唇と唇が重なった様な感触がした。

1秒位でその感触は消えた。

「片岡光治、私はお前に一目惚れした。結婚してくれ」

転校生は顔を赤くしながら、とんでもない事を言ってきた。しばらくすると

「『『『『ええー！？』』』」

「はあ！？」

とクラスの全員が驚いた

。勿論俺もだ。

おかしいだろ、恋愛ってのは普通はまず恋人からでそこから結婚に発展するか別れるかなのに、コイツのは何だ？いきなりキスして結婚しろ？色々と省きすぎだろ。

この日、俺はファーストキスを訳も分からない状態で奪われて、殆んど男子から非難の視線を浴びさせられて、色々大変な毎日になった。

（現在）

「あの日から俺は色々大変なんだよ。

修学旅行で浴場で一人になった時に何故か入ってるし、自宅で朝起きたら、何故か全裸の楓が隣で寝てた事もあったし、まあコレはもうやってないけどな」

「なるほどね、アンタも大変なのね。

ま、まさかファーストキスのあ、相手が、か、会長だったなんてね」

俺が過去の事を話すと鈴木は何故か動揺していたが理由は聞かないでおこう。

「実はな、一つだけすまないと思ってる事があるんだよ」

「何なの？」

俺が一つだけすまないと思ってる事を話すと鈴木が聞いてきた。

「アイツ本当は此処より上の高校に推薦を受けてたんだけど、わざわざそれを蹴って此処の学校に受けたんだ。それに対して俺はすまないと思ってるんだ」「確かに会長の学力ならもつと上の高校に行けたわね」

俺の言った事に鈴木も同感のようだ。すると楓が鈴木を叩いた。

「気にするな李奈、私はどんな高校でも光治さえいればそれで良いんだ」

何だろう、喜んで良いのか悪いのか分からねえや。

「そうだ光治、此処から脱出出来たらファーストキスをやり直しても良いぞ。アレは私も納得できてないまからな。それと、またあの時の様に一緒に寝てやっても良いぞ。勿論全裸でな」

さっきの話、全部聞こえてたのか・・・

「いや、アレはもういい。つか、何で俺と一緒に寝てくれと頼んだ様な言い方をすんだ！それに、さっきキスしたじゃねえか！なんでやり直す必要があるんだ！？」

「そんなの私の本能が勝手にそうさせてしまったからに決まってるだろう。夫婦ならば両者が意識してやらないとな・・・ん？そ

うだ、今の思いで話で大事な事を思い出したぞ」

話の途中で楓が何かを思い出したようだが、何か物凄く嫌な予感がある……」

「な、何だ？」

俺はとりあえず聞いてみる。ああ、とても嫌な予感する。

「なあ光治、式は何時あげるんだ？」

「……はい？」

式をあげる？何の事だ？

「だから結婚式だ。何時私達は結婚するんだ？もう婚姻届は出したというのに」

結婚式？婚姻届？何の事だ？とりあえず聞いてみよう

「なあ楓、俺はお前と結婚する約束した覚えがないんだが……それに、勝手に俺とお前の婚姻届を出したのか？」

俺は一応聞いてみた。

「何だ忘れたのか？まったく、光治は忘れやすい性格なのか？まあそれよりも婚姻届の事だが、正直お前に内緒で出したのは、すまないと思ってる。だが、お前に見つかる処分されるから、仕方なくお前の家の印鑑を盗ってしまったんだ。許してくれ」

「ああなるほどね、じゃあ仕方ない・・・訳ねえだろ！何勝手に俺達を本当に夫婦にしてくれよ！それに勝手に人の家の印鑑盗んでじゃねえ！」

「まったく、ゾンビが現れなかったら、今頃私達は結婚式の予定を話し合っていたというのに、光治も辛いのか」

駄目だ、まったく俺の話を聞いてない様だからからこれ以上何か言うのは止めよう。それよりも・・・

「もういいから、女性陣はとりあえず掃除の邪魔にならない所に移動してくれ」

「光治は素直じゃないな。私と結婚したいならそう言えば良いのに」

「早く行け！！」

俺が怒鳴ると楓は黙りこんだ。

あつ！ヤベエ、またついカツとなっちった。

「わ、わりい楓、ついカツとなつて」

「いや、さすがに今回は私が悪かった」

今回はって、その何時もは悪くないみたいない方なんなんだ・・・

「分かった。じゃあ掃除の邪魔にならない所で休んでくれ」

さつきはキツイ口調で言ったから、今度は優しい口調で言った。

「すまないな」

楓はニコリと微笑んでから鈴木達と死体が無い所へ移動した。

「どつりでモテる訳だ」

「隆二、どうゆう事だ？」

隆二の言った事が分からないから聞いてみると、「何でもねえよ」と言つて近くにあった死体の所に向かった。

気になるが今は死体を片付けるのが先だな。

俺はとりあえず一番近くにあった死体の所に向かった。

そして死体等を隅に片付けた後、皆に楓の自己紹介をする事にした。

「吉田楓だ。」

クラスは3年A組で元生徒会長だ。ちなみにファーストキスの相手は其処にいる光治とで、昨日に婚姻届を出して今は夫婦だ。よろしく」

楓は皆に自己紹介をしてニコリとした。

笑うと可愛いんだけどなあ……でも、アレのせいで色々大変なんだよなあ……

「……楓先輩、羨ましいです」

と今まで黙っていた葵がやっと喋った。
羨ましいって、こっちからすれば物凄い迷惑なんだけどな……

「じゃあ楓の紹介が終わったから情報を集めるか」
俺は皆にそう呼びかけた。

第5話 夫婦になれるのは女性は16歳、男性は18歳になってから（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

あと、キャラクター紹介に新キャラを追加しました。

第6話 一体俺達、この先どうなるの？（前書き）

本当はゾンビは出さないつもりでしたが、ちょこつと出してしまいました。

第6話 一体俺達、この先どうなるの？

「じゃあ、とりあえず情報収集でもするか」

と俺は皆に聞こえる様に言った。

「そうね。」

何で、ゾンビが現れたのか知りたいしね」

どうやら鈴木は賛成のようだ。

「どのくらい被害を受けてるかも知りたいな」

隆二も賛成か・・・まあ、皆も同じ事を考えてるだろうから、良いかな。

「じゃあ早速、情報を集めるか」

俺はそう言つて近くのパソコンの所へ行つて電源を入れた。

そして、Y a • o o J • P • Nを開いた。

「おお、凄いな。」

皆見てみるよ」

俺がそう言つと皆はY a • o oのニュース記事に釘付けになった。

「す、凄いな・・・」

祐介は思わず息を飲む。

「これは・・・こんな事が有り得るのか？」

楓はどうやら信じられない様だ。

まあ無理もないな。何せ記事の内容は

「2012・12/10・09:25

ヨーロッパ州、アメリカで人が突如凶暴化！政府は軍による事態の鎮圧を発令するが、未だに原因は不明」

「2012・12/15・12:02

アメリカ、イギリスのCDCから、あるウイルスが何者かによって盗まれた事が発覚！英、米政府は「バイオテロの可能性がある」と発表」

「2012・12/19・15:27

国立感染症研究所から”レベル4の中で最も危険なウイルス”が盗まれたいた事が発覚！警察はバイオテロの可能性もあるとして犯人を捜索中」

「2012・12/22・08:01

関東地方でも人が凶暴化！政府は警察による事態の鎮圧を発令」

といった、要するにゾンビ関連の記事ばかりで、十日位前にイギリスとアメリカで今と同じ事が起こり始めた様だ。

「これは、近いうちに世界中で起こるかもしれない・・・」

「同感だ」

俺の思ってたことを隆二も思ってたらしい。

「な、なあ、俺達この先どうなるんだ？」

吉彦がかなり動揺した様子で聞いてきた。

「吉彦、はっきり言っておくが……このままだと人類は皆ゾンビになるだろうな」

俺は自分が思っていた事をそのまま答えた。

「そ、そうか……」

まずいな……吉彦の奴、物凄く動揺してやがるな。
どうするかなあ……そうだ！

「吉彦、とりあえずレッ。リ聞いて落ち着け」

俺は吉彦を落ち着かせる為にレッ。リを聞く事を薦めた。
すると吉彦は

「ああ……」

とだけ言って、制服からイヤホン付きのi podを取り出してイヤホンを耳にかけた。

「吉彦君、物凄く動揺してるけど大丈夫かなあ」

綾香が吉彦を心配そうに見ている。

「ああ、確かにな」

俺も同感だ。

吉彦には何時もの様に帰ってもらわないと、俺達が全滅する可能性があるし、正直アイツも死んでほしくはない。

「先輩……僕達どうなるんでしょうか……」

幸助が酷く落ち込んだ様子で聞いてきた。

「大丈夫だ。」

俺が誰も死なせはしないからな」

「そうですか。」

じゃあ先輩、もし僕がゾンビになったら「この嘘つきめええええ
！！」と叫びながら走って追いかけますから」

幸助は俺が言った事に安心したのか、冗談を言ってきた。

「なら、死なせない様に頑張らないといけないな」

俺は幸助の冗談にわざとのった。

すると、今度は綾香が来た。アイツも動揺してたのか。

「ねえ、光治君」

「なんだ？」

「CDCとか、国立感染症研究所とかって何？」

・・・あれ？全然動揺してないんだけど・・・何？この騙された感・・・

まあ、とりあえず教えとくか。

「CDCつてのは、アメリカとかにある疾病管理予防センターの事で、そこに危険な細菌やウイルスを厳重に保管、そして研究しているんだ。

国立感染症研究所は、その日本バージョンって訳だ。分かったか？」

俺は綾香にCDCと国立感染症研究所の事を簡単に説明した。

「へえ、光治君は詳しいんだね」

「いや、実際には祐介に“未知のウイルスによる感染”を扱った映画とかで出るから覚えとけ」と言われて無理矢理覚えさせられた事だからな」

綾香に褒められたけど、俺は知ってる理由を話した。

「あ、そうだよ思い出したよ。

CDCって言葉がR・Cノク。ラン。イン2で出てきたんだよ」

・・・はい？

綾香が何か思い出した様だけど、俺にはサッパリです。

何か祐介がいきなり肩に手を置いてきた。

「な、覚えてて正解だったろ」

やかましいわバカ！

なんなんだその？は！？すげえムカツクんだけど！

「ねえ、これからどうすんの？」

このやり取りに呆れたのか鈴木がこの先どうするか聞いてきた。

「とりあえず、此处に居ても直ぐに死ぬから学校から出る」

「それから？」

「それから……ええっと……分からねえ……」

「はあ！？アンタ、それ本気で言ってる訳！？」

鈴木に怒られてしまいました……

「ま、まあ、とりあえず食料を確保しながら安全な場所を探すから大丈夫だ」

「本当に大丈夫なの？」

頼む！これ以上ダメ出ししないでくれ！

俺の精神がボロ炭の様に崩れ落ちてしまう！

「まあ李奈、そのくらいにしといてやれ」

丁度良いタイミングで楓が来てくれた。

ナイス楓！と俺は心の中で叫んだ。

「でも会長、コイツ後の事を何も考えてないんですよ！」

すると鈴木が楓に意見してきた。

「成る程、だけど李奈、こういう時は後の事よりも今、どうやって脱出するかの方が最優先じゃないのか？」

「確かにそうですけど……」

さすがは元会長だ。

あんな短い言葉で鈴木を納得させてるぞ。

「まったく、お前は何時も先の事ばかり気にしすぎで、今どうするかとなると全然駄目だからな。
だから何時まで経ってもお前が好き」

「分かりました！分かりましたから、それ以上先は言わないでください！！」

楓が何かを言いかけた途端、鈴木は顔を真っ赤にして叫んだ。
何か知られたくない事があるんだろうな。
そんな事よりも……

「なあ楓、なんで鈴木はお前に敬語を使ってるんだ？」

俺は鈴木と楓の会話で気になった事を聞いた。

「なんだ光治、まさか浮気か？」

「違いよ！てゆうか、何で俺達が夫婦になってんだよ！！」

「さっき話したじゃないか。「昨日婚姻届を出した」って、まったく

く光治は物忘れが激しいな」

そうだった。

楓に勝手に婚姻届を出されて夫婦になっていたんだ・・・
とりあえず・・・話を戻そう。

「浮気じゃねえよ。

ただ、同じ年なのに何で敬語を使ってるか気になったただけだよ」

「実のところ、私にも分からないんだ」

アレ？楓自身も分からないのか？
じゃあ仕方ないな。

「それよりダーリン、これからどうするんだ」

楓がこの先どうするか聞いてきた。

「そうだな、とりあえず野球部の部室に行ってバットを手に入れてから、なるべく無駄な戦闘を避けながら脱出するつもりだ」

「無駄な戦闘を避けるか・・・確かに、死亡する確率が下がるから良い案だな」

おっ、ちょっとした案なのに結構評価が高いな。
そうだ、一言言っておかないと

「そうだ楓、その”ダーリン”だけは止めてくれ。吐き気がするから」

「そうか、それはすまなかった。もう言わないよ」

実際吐き気はしないけど、凄く嫌な気分になるからな。
楓の性格上、もう二度と言わないだろう。

「あつ、そういえば光治」

「何だ？」

楓が何かを思い出したらしく俺を呼んだ。

「私が持っていたバットを知らないか？さっき起きてからずっと見たらないんだが・・・」

バット？・・・ああ、俺がさっき見つけたアレか

「それなら、お前が眠ってた所辺りにあったぞ」

「そうか、すまないな」

俺が教えると楓は礼を言ってから自分がさっきまで眠っていた所に向かった。そして、楓と入れ代わる様にして光太と葵が来た。

「・・・楓先輩と仲が良いんですね」

「ああ、まあな」

「・・・夫婦ですか、羨ましいです」

うーん、コレって喜んで良いのか？悪いのか？・・・って、あれ？

「なあ、まさかそれを言う為だけに二人で来たわけじゃないよな？」

俺は気になった事を聞いてみた。

今”はい”と答えたら多分ぶちギレるな俺。

「違いますよ。

ただ、扉か窓のどっちから出るのか聞きに來ただけですよ」

ああ、その事か。

「それは、皆を集めてから話すよ」

俺がそう言つと二人は

「そうですか」

「……夫婦なんて羨ましいです」

と言つて戻つていった。つか葵、どんだけ羨ましがってるんだよ・
・

そつえば、隆二はさっきから座禅組んで何してるんだ？

「待たせたな、私と離れて寂しかったか？」

俺が氣になつて調べに行こうとした瞬間、バットを持った楓が戻つて來た。

「別に寂しくはないけど、何で俺がお前にデレデレみたいな言い方をするんだ？」

「何だ？違うのか？」

「違うわ！俺が何時お前がそう思う様な言い方したんだ！？」

「おかしいな・・・アレは夢だったのか・・・」

ああ、夢の話か・・・なら、あんな事を言ったのか納得できる気がする。

「もういい、それよりそろそろ行くか」

「そうだな」

「皆！そろそろ学校からおさらばするぞ」

俺は皆に聞こえる様に言った。すると一部の女子と隆二を除いた5人が自分の武器を持って

「……………待つてたぜ（待つてたわよバカ！）（…待つてましたよ）
（……………）」

と同時に言った。

あれ？皆何でこんなにヤル気満々なんだ？
吉彦がいつの間にか復活してるし。

「うう……………」

お、隆二が起きたようだな。

「もう行くのか？」

と隆二が俺に聞いてきた。

「ああ。

そういえば、お前やけに静かだったけど、座禅組んで何してたんだ？」

俺は答えてから気になった事を聞いた。

「ああ、寝てた」

寝てた？ああ、そうですか……

「で、何処から出るんだ？窓か？扉からか？」

「そうだな……とりあえず前は危ないから窓からでるk」

バンバンバン！

窓が叩かれる音がした。ゾンビが来たんだろう。

「と思ったけど、窓の方にゾンビが来たから扉からd」

バンバンバン！

どうやら、ゾンビがやって来た様だ。

「も出れないな」

隆二が続きを言ってくれた。
ぶちギレて良いですか？

「ねえ光治、どうするのよ」

鈴木が聞いてきた。

勿論答えは一つに決まってる。

「さあ・・・どうなるんだろううな俺達」

第6話 一体俺達、この先どうなるの？（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第7話 マジで不幸すぎるんだけど・・・（前書き）

今回はいつもより若干短いです。

第7話 マジで不幸すぎるんだけど・・・

「俺達、一体どうなるんだろう・・・？」

俺は皆にとりあえず聞いてみた。

何故って？そりゃ、窓と扉と言う2つしかない出入口をゾンビ塞がれたんだぞ！こんな事、普通に言いたくなるわ！

「知らないわよ。

むしろ、アタシが知りたいわよ」

唯一鈴木だけが答えてくれたけど、俺と同じ事を考えていた様だ。そして皆は黙りこんで、聞こえるのはゾンビが窓と扉を叩く音だけになった。

「やるしかないな」

隆二が口を開いた。

「やるって、何をやるんだ？」

俺はとりあえず聞いてみた。

「窓と扉が破られるまでは時間があるから、どっちか片方を開けて中にゾンビ達を入れて、ソイツらをぶっ潰せばいいんだ」

「かなり危険だけど、この際仕方ないか。
で、誰が開けるんだ？」

隆二の危険な案に仕方なく賛成して誰が開けるかを聞くと、一斉にこっちを見てきた……って俺！？

「お前らは目で俺に「さっさとゾンビに喰われて死んじまえ！」って言ってるのか！？」

「わがまま言ってる場合じゃないだろ。早くどっちか開ける」

隆二が殺気を込めながら言う。

隆二……そんなの無茶苦茶理不尽だろ……

俺に拒否する権利は無いのかよ……

「わかったよ……」

俺は諦めて窓に向かい、そして窓に手をかけた。何で窓にしたかって？なんとなくだよ。

「よし開けるぞ、期を引き締めろよ」

俺が皆に言うと、皆は自分の持っている武器を構えながら頷いた。ちなみに皆の（俺自身も含めた）武器は

椅子：幸助、光太、祐介

ギター：隆二、俺

ベース：吉彦

木刀：鈴木

バット：楓

武器なし：綾香、葵

となっている。

そして俺は拳二個分位の隙間を開けた。

「うおっ！」

俺は開けた隙間から無数のゾンビの手が出てきたから直ぐに下がって、自分の武器であるギターを持って構えた。

窓の隙間が広くなっていき、徐々にゾンビのグロテスクな顔が見えてきている。

生前に眼球を喰われたらしいゾンビや顔の骨が露出してる奴もいるし、唇が無くなっていて歯が見えてる奴もいた。

そして、その内の一体が窓から入って来た。それを拍子に次々と他の奴らも入って来て、こっちに向かって歩いてきている。

「よし、行くぞ！」

俺がそう言って駆け出したと同時に隆二、鈴木、楓、吉彦が駆け出す。

俺が一番近くに居るゾンビの頭を狙ってギターを横に振った。

ゾンビは少し吹っ飛んで倒れたが、まだ動いているが、そこに椅子を持った祐介が来て倒れているゾンビの頭に椅子の足の部分を降り下ろした。

グシャッ！

と音がしてゾンビは動かなくなった。

ゾンビの頭からはグシャグシャになった脳が流れ出ていた。

隆二達は次々とゾンビの頭を潰していつていた。

あれ？隆二は俺と同じギターなのに何で一撃で倒してるんだ？

って、そんな事考えてる場合じゃないか。

俺はまた近くに居るゾンビにギターのフルスイングをお見舞いした。

グシャツ！

と頭が潰れる音がしてゾンビは倒れた。

一発で倒せると何か気持ち良いな。

三体目のゾンビを倒そうとしたが、もう既に”窓から来た組”は全滅していた。

俺が倒したのを含めた10体のゾンビの死体（既に一回死んでるけど）がそこらに転がっていた。

「よし、じゃあ早く此处からおさらばするか」

俺達は窓からベランダに出た。

そして今はベランダを歩いていて、その後何も起こらずにどっかの教室に入った。

え？何か起こってほしかった？・・・フザケンナ！こっちは生と死の狭間を歩いてる様なもんなんだぞ！

そして、教室の扉を開けて廊下を走って、階段をかけ降りて、またかけ降りてってようやく一階についた。

「あれ？そういえば、さつきからゾンビ達が見えない様な」

俺は、ふと気になった事を言った。

「ゾンビが居ないなら、それはそれで良いじゃない」

「あのなあ鈴木、確かにゾンビが居ない事は良いことだけど、逆に何か気になるだろ」

「確かにちよつと気になるけど・・・」

「何してるんだ、早く来いよ」

隆二が俺達を呼んでいるな・・・って、あれ？俺達止まってたの？

「お、おい早く行くぞ」

「え！？あ、うん」

何か鈴木の返事が曖昧だったが、そんなのは一々気にしてられない。そして俺達は昇降口で靴を履き替えて外に出た。

あとは、部室に行つてバットを手に入れて校庭を突っ切つて行くだけだ。

「よし、早く部室に行こう」

俺達は部室に向かつて行つた。

そして、その途中でゾンビが三体出てきたからとりあえずSAT UGAIして野球部の部室前にやって来ました。

「鍵は・・・ラッキー何故か掛かってないぜ」

「この学校って、大丈夫なのか？」

祐介は鍵が掛かってない事に大して呆れている。

「とりあえず中に入るかな。そうだ楓、ちょっとバット貸してくれないか？」

「別に構わないが」

「そうか、サンキュー」

俺は楓が使用していたバットを借りて中に入って、偶然中で食事中だったゾンビの頭を潰して、ついでに、喰われた奴（もう死体だが）の頭も潰しておいて部室内にあった全てのバットと何か使えそうなエナメルバック2つを取って部室から出た。

「じゃあ皆で分けるか」

俺はそう言って吉彦、鈴木、綾香、葵を除いた6人（自分を含めた）で分けた。

それでも数本残ったからバックに入れて綾香と葵に持たせた。

「後は、校庭を突っ切るだけだな」

俺達は校庭に向かった。

あとは突っ切るだけだと思っていたが、校庭を見た俺は思わず

「は？何これ？」

と言ってしまった。

何故なら、校庭にはおびただしい程のゾンビの大群が居たからだ。

「光治テメエ！何が「ゆつくり行くぞ」だ、いきなり大声上げて思いきりダッシュしゃがって！」

祐介が怒鳴ってきた。

「仕方ねえだろ！アイツ等目が見える奴だったんだから！」

俺は大声を上げて思いきりダッシュした理由を言った。

「ゾンビが目が見えるのは当たり前だろうが！」

祐介に反論された。

だって、ス。デットだとアイツ等目が見えないんだぞ！目の前にゾンビが居たが

俺は

「邪魔だあああ！」

と叫んでゾンビをぶつ潰してまたダッシュした。

「もうすぐ校門だぞ！頑張れ！」

俺は皆に向かって大声で言った。

まあ、猛ダッシュしてればあつという間につくよな。

そして待たしてもゾンビが立ちはだかったから、真っ先にバットで雑払った。

校門の目の前に来た瞬間

「ギヤアアアア！」

と誰かの悲鳴がしたから振り向くと、ゾンビが何かに群がっていた。今居るのは、祐介、綾香、隆二、鈴木、吉彦、楓、光太、葵……居ない、幸助が居ない。

ゾンビが群がっている所は、俺がゾンビを薙払った所だ。

「クソッ！」

俺は自分の過ちに苛立ちを感じて悪態を吐いた。

あの時、ゾンビはまだ殺られてなくて、ソレが幸助の足を掴んだのだ。

「おい光治早く行くぞ！幸助はもう助からない」

隆二の言うとおりだ。

幸助はもう助からない、死んだんだ。

「幸助ゴメン！！」

俺は幸助に謝ってから、皆と共に学校から出た。

第7話 マジで不幸すぎるんだけど・・・（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

第8話 やっぱり娑婆の空気はつまいぜ（前書き）

新キャラがちよこつとだけ出てきます。

第8話 やっぱり娑婆の空気はつまいぜ

何とか学校から出た俺達は、とりあえず近くのコンビニに向かって
いる訳だが・・・

街は学校より酷い事になっているんだよねコレが。あちこちで車が
炎上してるし道路とかには血や骨や内臓とかが散乱していて臭いの
なので、それに

ドガアアアアン！！！！

さっきから今みたいな爆発があちこちで起こってるし

パン！パン！パン！

と銃声が聞こえるし、恐らく警察がゾンビに向かって発砲してるん
だろうけどね。

そんなこんなでしばらく歩いてるとコンビニに着いた。

「これは・・・酷い有り様だな」

まあ楓がそう言うのも無理はない。

コンビニのガラスは割れててさらに血が付いてるし、外から見ても
分かる位に中は色々と凄い事になっているからな。

「じゃあちよつと調べてくるか」

俺はバット片手にそう言ってコンビニの出入口（自動ドア）に向か
った。

すると、後ろから祐介と楓が来た。

「一人じゃ危険だろ」

「私は妻としてお前と行動を共にするからな」

「わかったよ。」

「じゃあ、入るぞ」

俺と祐介と楓の三人でコンビニに入った。

コンビニ内も壁や床に血が飛び散っていた。

「とりあえずゾンビがいるかもしれないから、手分けして調べるか」

俺が二人に言うと、楓が真っ先に俺のバットを持ってない方の腕に抱きついた。

「じゃあ私は光治と行動を共にしよう。何せ私達は夫婦だからな」

「あのなあ、それはk「オツケー、じゃあ俺は事務室の方を調べて来るよ」って、オイ」

俺が夫婦は関係無いと言おうとしたら祐介は勝手に事務室の方へ行ってしまった。

一応リーダーは俺だぞ……

「しょうがねえな。」

「じゃあ俺達は店内を調べるか」

「そつだな」

「ああそつだ。俺の腕に抱きつくな歩きづらい」

「別に良いだろう。何を恥ずかしがっているんだ？」

「もういい、好きにしろ」

俺は今の楓に何を言っても無駄だとわかったから、仕方なく諦めた。

「とりあえず便所だけ調べるか」

「何故トイレだけを調べるんだ？」

「居そうな感じがするからだよ」

俺は楓の質問に答えてから便所の前まで行き、とりあえずノックしてみたが、反応は無い。

「よし開けるぞ」

俺は取っ手に手をかけてゆつくりと扉を開けた。中には……誰も居なかった。

「誰も居ないか」

「光治、下を見てみる」

楓が何か気付いたらしく便所の床を指した。
そこには

「血？」

そう、床に血が付いていた。え？驚く事じゃない？いやいや、血と
いっても色々な所に飛び散ってるわけではなくて、引きずられた様
な血の跡があった。

「これは・・・用心した方が良いな」

「確かにそうだな」

さつきから俺の腕に抱きついていていた楓は腕から離れた。

足音を立てずにゆっくりと血の跡を辿って行くと、個室トイレに繋
がっていた。

「よし開けるぞ」

俺が楓に言くと、楓はバットを構えて頷いた。

そして、ゆっくりと個室トイレの扉を開けた。

中には・・・頭がグシャグシャになって顔がわからない様な人が
便座に座っていた。

あまりにグロ過ぎたから急いで扉を閉めた。

「よし、大丈夫だな。とりあえず戻るか」

「そ、そうだな」

さすがに刺激が強すぎたらしく楓は少し動揺していた。

楓を連れて店内に戻ると丁度祐介も戻ってきた。

「そっちはどうだった？」

俺はゾンビだとかが居ないか聞いてみた。

「誰も居なかったぞ。」

そっちはどうだったんだ？」

祐介は答えて、俺に同じ様な事を聞いてきた。

「トイレにグロい死体が一体あったが、ゾンビは居なかった」

「そうか」

「じゃあ、食料と水を探すか」

店内が安全だとわかったから俺達は食料と水を探すことにした。

そして収穫は、カロリーメイト数個、ポテトチップス数袋、おにぎり数個、etc

まずまずの収穫を得て、俺達はコンビニから出た。

「やっぱり娑婆の空気はうまいぜ」

「お前は犯罪者か？それとも長期入院でもしてたのか？」

祐介の言ったことに俺は突っ込んだ。

「収穫は？」

吉彦が真っ先に聞いてきた。

「まあまあだな。」

あと、吉彦の分は無いからな」

「えーマジで!?!」

「冗談だ」

俺はちょっと吉彦をからかった。
なんだろうな、こうからかって困ってる奴の顔を見ると心の何処かに
快樂が生まれてくるんだよな。

「アンタって、どっちかというところだね」

鈴木が開口一番にそう言った。

「酷いなまったく、俺はSじゃねえぞ。
ちょっと相手を困らせて快樂を得てるだけだぞ」

「そうゆう人をSって言うのよ」

反論したら鈴木に論破されました。やっぱり元副会長には敵わない
よまったく。

「そういえば先輩方、親に連絡したんですか?」

光太がいきなり俺達に聞いてきた。
親ねえ……

「してないぞ」

「ううん、してないよ」

「してないわ」

「してないな」

「そういえば、してないな」

「いや、してないが」

祐介、綾香、鈴木、隆二、吉彦、楓の順に答えた。俺は答えなかった。

「お前等は電話したのか？」

俺は光太と葵に同じ様な事を聞いた。

「はい、だけど親は出てきませんでした」

「・・・私も同じです」

なるほど、電話はしたけど出てないのか。

「じゃあ俺達も電話するか」

祐介がそう言ってケータイを出して電話をかけた。その後が続く様にして綾香、鈴木、吉彦、楓もケータイを出して電話をかけた。

しばらくすると、ケータイを出してた五人はケータイをしまって首を横に振った。

どうやら出なかったらしい。

「あれ？坂本先輩と片岡先輩は親に電話しないんですか？」

光太が電話をしなかった俺と隆二に聞いてきた。

「ああ、アイツなら大丈夫だろう」

大丈夫って、隆二の親は海外にいるのか？

「片岡先輩は？」

「親はいないよ。昔、交通事故で両親共々死んだんだ」

俺の言葉に皆は絶句した。やっぱりな、こうなると想像ついたよ。

「す、すいません」

「気にするな。俺だってガキじゃないからな」

光太が謝ってきたから俺は、気にしてないと答えた。それにしても・・・空気が重すぎる。

「それよりも、この後の事を考えようぜ」

俺は重すぎる空気を払う為に話題を変えた。すると、皆がいきなり武器を構えた。

ヤベエ、とりあえずまずは落ち着かせないと！

「まてまて！何か知らないが俺が悪かったから武器を下ろしてくれ！」

「そうじゃないわよバカ、後ろを見なさい」

俺は鈴木に言われた通りに後ろを向くと、ゾンビの大群が迫って来ていた。

「どうするんだ光治！」

吉彦が聞いてきた。

答えは一つだけに決まってるだろ。

「とりあえず……逃げるぞ！走れ！」

俺はそう答え、買い物籠の中にある食料と水が落ちない位のスピードで走った。他の奴も俺と一緒に走った。何かあのゾンビ達ちよっと速いんだけど、祐介に見せられたウ。ーキ。グ。ツドのと同じ位の速さなんだけど。

そして、しばらく走ってたら囲まれてしまいました。なんでだよ！学校からコンビニ行くまではゾンビなんて出てこなかったのに、何で今になってゾンビの大群が出てきて囲まれるんだよ！

「おい、どうするんだ！？」

祐介が慌てた様子で聞いてきた。

ええっと、どうする？何処かに道は無いのか！？

辺りを見回すと、一つだけ道を見つけた。

「あそこに行くぞ！」

俺はさっき見つけた一つだけの道の方向を指した。道といっても鳥居があつてその後ろには階段が続いてるだけだけど、今は道はそこ

しか無いので俺達は唯一残された道へと向かった。
ゾンビと戦えば？俺達にそんな事は出来ないぞ。全員がア。スミた
いに超人じゃないからな。

「本当に此方で大丈夫なの！？」

必死に階段をかけ上がつてると鈴木が心配になつたのか聞いてきた。

「しょうがねえだろ！此方に行かなかつたら、俺達死んでたんだぞ
！」

俺はそう答え、振り向かずに階段をかけ上がっていった。

しばらくすると、階段地獄が終わつてそこには神社が見えた。下を
見るとゾンビは見当たらない、きっと俺達を見失つたんだらう。

「中々良いところね」

どうやら鈴木はこの神社を気に入つたらしい・・・ん？あれは

「人？」

と俺が言つと皆が反応した。

「何処に居るんだ？」

隆二が聞いてきたから俺は無言で人が居る方向を指した。

「もしかするとゾンビかもしれないな」

確かに、楓の言うとおりだ。人だからといって生きてるかはまだわからない。

「幸い一体しかないんだけど、皆気を付けろよ。綾香はコレを持ってくれ」

俺はそう言つと皆が頷いたから、俺は綾香に食料と水が入った籠を綾香に渡してからゆっくりと歩き出した。

俺の後を皆がつけている。

そこには、巫女装束を着ている女性が箒を持って地面を掃いていた。巫女さんは俺達に気付いたのか此方を向いた。どうやらゾンビじゃない様だ。それにしても綺麗な人だなぁ、大和撫子だよアレ、思わず見とれてしまったよ。

「あら？こんな所にお客なんて珍しいわね」

巫女さんは優しい口調でそう言って微笑んだ。

第8話 やっぱり娑婆の空気はつまいぜ（後書き）

キャラクター紹介に新キャラを追加しました。

第9話 俺の周りは危険がいっぱい 俺は不幸の塊（前書き）

過去最高の長さです。文字数が万単位に達しました。

あと、アクセス数が2000を突破してもうすぐで3000になります。

こんなので読んでくださってありがとうございます。

第9話 俺の周りは危険がいっぱい 俺は不幸の塊

「あら？こんな所にお客なんて珍しいわね」

巫女はそう言つてニコリと微笑んだ。

そうだ、皆疲れてるだろうから一晩だけ此処に泊まらせてくれるように頼む為にこの神社の持ち主に会わせてもらおう。

「こんにちは、俺は片岡光治と言います。
いきなりですが、この神社にお住まいの方に会わせて頂けませんか？」

俺はまず自己紹介してから神社に住んでる人に会えないか聞いてみた。

「片岡光治君ねよろしくね。それで私の家に何か御用かしら？」

「・・・え？「私の家」？まさか・・・」

「もしかして、貴女がこの神社にお住まいの方ですか？」

俺は念のために聞いてみた。もし聞き間違いじゃないとしたら、この人は凄いぞ。

「ええ、そうよ。

この神社に住んでる北斗麻樹奈です。マキナって呼んでください」

巫女さん——北斗麻樹奈さん（以下マキナさん）は質問に答えてから自己紹介をした。

「ではマキナさん。

いきなりですが、一晩だけ此処に泊めさせてくれませんか？」

俺は早速この神社の持ち主であるマキナさんとの交渉を開始した。
何か結末が大体予想つくような・・・

「うーん・・・・・・・・いいわよ」

マキナさんは、ちょっと悩んでからOKしてくれた。

「本当ですか！ありがとうございm」でも、一つだけ聞きたい事があるの「え？」

聞きたい事？泊めてもらえるなら別に良いかな。

「いいですけど」

「貴方達が持つてる血の付いたバットの事なんだけど・・・・・・・・誰かを殺したの？」

「確かに殺しましたが、一度は死んだ人達しか殺してません」

俺はマキナさんに聞かれた事に対して、正直に答えた。

「一度は死んだ人達？」

マキナさんは首をかしげた。

あれ？この人ゾンビを知らないのか？いやいや、そんな筈がない。
今関東はゾンビに埋めつくされてるんだぞ。

とりあえず聞いてみるかな。

「えっと・・・マキナさん、ゾンビ達にあってないんですか？」

「ゾンビ？」

俺が聞くとマキナさんはまた首をかしげた。

え？ひよっとしてマキナさんは、今の惨状を知らないのか？

「あのマキナさん、今街で何が起きてるか知ってますか？」

「いいえ、知らないわ。」

さっきから聞こえる音と何か関係してるの？」

・・・知らない？何で？いくらゾンビを見てなくても街がどうなってるか位は分かる筈なのに・・・
まあ知らないなら教えるか。

「良いですかマキナさん。今街では——」

俺はマキナさんに今の状況とゾンビの事等を説明した。説明は長くなるから省略な。

「——って事なんです。わかりましたか」

「随分と大変だったのね。だったら今日はゆっくり泊まっていて」

ようやく事態を呑み込めたマキナさんであった。
それにしても、辺りが暗くなってきたな。ようやく夜の始まりだよ。

「じゃあ、案内するから付いてきて」

俺達はマキナさんの後をついていった。

「しかしマキナさんは物凄い美人だな」

俺の隣にいた変態の祐介がそんな事を言ってきた。まあ否定はしねえけどな。

「ああ、そうだな」

俺はめんどくさいから適当に流した。

「妻持ちの光治は、もう他の女には興味が無いのか」

「あのなあ、言っておくがアレは楓が勝手にしたことであれは認めたわけじゃねえからな」

まったく、本当にめんどくさい……

祐介と話したら神社の前に着いて、そして中に入った。靴を脱いでからまたマキナさんの後についていった。

しかし広いな。まるで迷宮のようだから迷ったらどうしよう……

しばらく歩いてると廊下のご真ん中でマキナさんが止まった。

「男性陣は右の部屋で女性陣は左の部屋ね」

「わかりました」

俺はそう言ってとりあえず右の部屋の襖を開けた。

部屋を見て最初に思う事は・・・

「広い・・・」

俺はおもわず思ってた事を口に出した。
多分十人位は、この部屋で寝れるよ。

「じゃあ私は晩御飯を作るからそれまでゆっくりしてて」

マキナさんはそう言った後、俺達を残して迷宮と言う名の廊下を歩いていった。

やっぱり住んでる人は迷ったりしないのかな？

「さてと、マキナさんが来るまで俺は寝させてもらうか」

隆二はそう言って右の部屋に入ってしまった。

「じゃあ、ゾンビの脅威が一時的に去った訳だし、今日はゆっくりするかな」

「それもそうね。」

アタシはもうクタクタよ」

俺が言った事に鈴木は賛成らしい。

そして、俺達男子はさっき隆二が入った右の部屋に、女子は左の部屋に入ってしまった。

なんか楓が嫌そうな顔をしていたが俺は気にしない。

ちなみに、コンビ二で集めた食料は一応均等に分けといた。

「さてと、特にやることは無いから俺も寝るか」

俺は仰向けになって目を閉じた。
物凄く疲れてたから直ぐに夢の世界にトリップした。

「……………て……………さい……………」

「……………ろ……………じ……………」

何だ？誰かの話し声が聞こえる……………

「……………アタ……………に……………せて……………」

何か言ってる様だけど、まったく聞き取れない……………

「起きなさいよバカ！」

「グフツ！！！」

腹の辺りの激痛によって俺は覚醒した。
そして起きて最初に言った言葉は

「いってええええええ！！！」

俺は痛み之余りに、腹を押さえて転がった。

「アンタがさっさと起きないからアタシが起こしてやったのよ」

「鈴木、お前かぁ・・・」

どうやら鈴木が俺の腹に何かをしたらしい。
さすがに木刀ではないのは分かる、だって木刀だったら今頃三途の川にいるからな。
となると、大体予想はつく。

「お前、思い切り踏みつけやがったな・・・」

「アンタがいつまでも寝てるからじゃない」

やっぱり足か・・・

しかし、今のは痛かったぞ・・・痛かったぞおおお!!
俺は心の中でフーザみたいに叫んだ。

「すまないな。私は必死に止めようとしたんだが」

「仕方ないだろ、だって鈴木何だから」

何か楓が謝ってきたので、俺はとりあえず許した。すると

「ちょっと！今の言葉はどうゆう事よ！」

「おお、ナイスツツコミ」

俺は鈴木のツツコミに思わず感心した。

「アンタ、いい加減にしなさいよ・・・」

そう言った鈴木が手に握った物は・・・バット!?

「待て待て待て！俺が悪かったからバットを置いてくれ！そんな物食らったら三途の川に転送されるって！」

俺は必死にバットを構えている鈴木に謝る。

何か世紀末のザコ敵が言いそうな感じだが、そんな事は言ってもらえない。

俺の命が危ないから！

「まったく、しょうがないわね今回だけだからね」

鈴木はそう言っただけでバットを畳の上に置いた。
た、助かった・・・

アレ？何で俺を起こしたんだっけ？

「なあ、何で俺を起こしたんだっけ？」

俺は気になった事を聞いてみた。

「夕食が出来たからマキナさんに呼びに行っただけで頼まれたのよ」

俺が聞いたことに鈴木が答えた。

「あれ？お前ずっと部屋にいたんじゃないの？」

「やることがないから、アタシ達はマキナさんの所に行って料理を手伝ってたのよ」

え？手伝った？あの迷宮みたいな廊下を歩いてマキナさんを探したのか？

「凄いな。よく迷宮みたいな廊下を歩いてマキナさんを見つけたな」

「違うわよ。すぐそこに厨房があるのよ」

鈴木はそう言つてさつきマキナさんが歩いて行つた廊下を指した。

「ああ、なるほどね」

ようやく分かりました。

鈴木達はすぐそこにある厨房に行つてマキナさんの手伝いをしたという事です。

「わかつたなら早く行くわよ。マキナさん待つてるし」

「そつだな」

そして俺達一行はマキナさんが待つてゐる厨房へと向かつた。

女性陣全員で料理したのか・・・もしも、兵器を造る奴があの中にいたらどうなるんだ・・・？

と考えていたら厨房に着いた。まあ、すぐ近くだからな。

どうやら厨房は洋室の様な造りになっているらしく、真ん中に置かれてゐるテーブルの上には今日の夕食が置かれてゐる。

白飯、味噌汁、ホウレン草のお浸し等々と言つた和の料理が並んでいてどれも旨そつだ。

そしてそこには、マキナさんが椅子に座つて待つていたようだ。

「何だか大きな声がしていたけど、大丈夫だったの？」

マキナさんが大きな声「俺の声が気になったらしく聞いてきた。それに対して鈴木は大丈夫と答えた。

「そうなの？だったら夕飯にしましょう。適当な所に座って」

俺達はとりあえず空いてる席に適当に座った。

ちなみに席順は時計周りで

マキナさん、綾香、楓、俺、鈴木、隆二、祐介、吉彦、光太、葵となっている……アレ？何で俺だけ女に挟まれてるんだ？

「いただきます」

マキナさんは両手を合わせてそう言った。

他の皆もマキナさんと同じ事をした。

俺も皆と少し遅れて両手を合わせて、とりあえず近くにあった秋刀魚を食べる事にした。

秋刀魚の身を取って、口の中に入れた。さて、お味の方は……

「う、美味い」

あまりの美味さに思わず口に出した。

「気に入ってくれたの？ありがとうね」

マキナさんはそう言ってニコリと微笑んだ。

その綺麗な笑顔を見た俺は思わず目をそらして

「い、いえ」

と言った。

今まで会った女の中でマキナさんは一番綺麗な笑顔を持っていると思う、俺的には。

何だろう？俺の両隣から何か殺気の様なのが・・・

「ねえ、何でそんな顔を赤くしてるのかしら？」

「光治、私という最愛の妻がいるのに浮気か？」

両隣にいた鈴木と楓が質問してきた。

二人共！何か黒いよ！黒いオーラが出てるって！

「あら？楓ちゃんと光治君は夫婦だったの？」

マキナさんが楓に気になった事を聞いてきた。

てか、マキナさん！今そんな事を聞いたら、”楽しい食卓”が下手したら”鮮血の食卓”に早変わりしちゃうから！

「はい、私と光治は昨日婚姻届を出して正式な夫婦になったんです」

「あらそうだったの。」

これからも末長くお幸せにね」

「ありがとうございます」

おお！マキナさんのおかげで黒いオーラが一つ消えたぞ！

でも、あと一つのオーラは・・・消えてない。

消えるどころかオーラがさっきより強大になっているじゃないか！

「ちょっと待ってて下さいね」

マキナさんはそう言って厨房から出ていった。
一体何処に行くんだ？

「ねえ、なんでアンタはさっきからマキナさんばかり見てるのかなあ？」

鈴木さん！怖い！怖いって！その感情を変えずに質問してくるの怖いって！

「い、いや、あの「ヒッ！」って、え？」

鈴木がいきなり怯え出したから何かと思うと、鈴木の首に刀が当てられていた。木刀ではなくちゃんとした真剣。その刀を持っている人は……マキナさんだった。

「李奈ちゃん、食事中は殺気を蔓延させないでほしいの。わかった？」

「は、はい……」

「わかったわね？今度食事中に殺気を出したら……この刀を勢いよく引きますからね」

マキナさんは鈴木に警告をしてから鈴木の首から刀を離した。
何？今の絶対零度の空気は……マキナさん怖すぎるって。
そして刀を鞘に納めると

「わかってくれれば良いのよ」

いつものマキナさんに戻ってニコリと微笑んだ。
よし、今のは”裏マキナさん”と命名しよう。

その後は勿論、しばらくは沈黙が広がっていたが、楓のおかげで沈黙が消えた代わりに俺は楓に口移しをやられた……

そして、色々な事があった夕食は終わって今はマキナさんが出したお茶を飲んでいる。

「ああ、美味しい……」

「ありがとう」

俺が言った事に、マキナさんは礼を言っただけで微笑んだ。

笑うと綺麗なのになあ……。まあ完璧な人間なんていないからな、誰だって欠点とかはあるさ。

さてと、そろそろ情報でも集めるかな。

こういった事態になったんだから、情報はなるべく新しい方が良さだろう。

「マキナさん、テレビつけてくれませんか？」

「ええ、いいわよ」

俺が頼むとマキナさんはリモコンを取ってテレビを着けた。当たり前だけど、地。ジ化はしてあった。

そして、早速テレビに映ったのは……。お花畑でした。しかも画面の中央には「しばらくお待ちください」の文字がある。

「ちょっと、リモコン貸してください」

俺はマキナさんからリモコンを渡されると、チャンネルを変えていった。

どのチャンネルもお花畑だったが、1チャンネルだけは違った。俺達はテレビの画面に釘付けになった。

『現在、暴動は中部、東北地方の一部まで拡がっていて、警察は事態の鎮圧を行っています』

暴動！？そんな生易しいもんじゃないだろ！人が人を喰ってるんだぞ！

『今日は国立感染症研究所の研究員の後藤昌義さんに来ていただきました』

とキャスターが言った後、白衣を着た初老の男性にカメラが回った。

『後藤さん、この暴動が起こる前に危険なウイルスが盗まれたとあります。そのウイルスは人体にどのような危険を及ぼすのですか？また、そのウイルスと今回の暴動に何か関連性はあるのですか？』

『実はそのウイルスの事は謎に包まれていて私にも全くわかりません。』

ですから、今回の暴動にウイルスが関連してると決まったわけではありません』

「なんだよ、使えねえ研究員だなあ」

「光治、お前ってたまに酷い事言うよな」

俺がテレビに出ている研究員に対して言った事に祐介が突っ込んできた。

これでもまだ軽い方なんだからな。でも、これより酷い事を言つと多分マキナさんに殺られるからな。

『 Bannon! 』

な、なんだ! ? お前達は! 今は撮影もや、やめろ! グギヤアアアアア
ア! ! ! 』

どうやら局にゾンビが入ってきたらしく、あつという間にスタジオはゾンビによつて血まみれになった。俺はテレビの電源を切った。

「今の方々が、その”ゾンビ”って方なの? 」

マキナさんが俺に聞いてきた。今の方々? …ああ、スタジオに乱入してきた奴等の事か。

「はい、今のスタジオに入ってきたのか”ゾンビ”です」

俺は質問に答えると、マキナさんは難しい顔をした。やっぱり、あんなのを見たら最初は誰だつて動揺したりするよな。

「人の肉なんて食べて美味しいのかしら・・・」

あれ? 何か違う、何か他の人と違うよ! やっぱり、皆も驚いた顔をしている。

「あら? 皆さんどうかしたの? 」

「『『『『『『『』』』』』』』』な、なんでもありません! 大丈夫です! 』』』』」

「」

「別に・・・」

マキナさんが俺達の表情に気付いたらしく聞いてきたから、俺達は大丈夫と答えた。隆二は俺達より少し遅れて答えた。それにしても、8人がハモるのは凄いな。

「そう？ならいいんだけど・・・あ、そうだ。せっかくだからお風呂にでも入ってきたら？」

風呂？確かに今日が最後の風呂になるかもしれないから、まあ良いか。

「じゃあ、そうさせていただきます」

「あら、家のお風呂は広いから此処にいる全員で入れるわよ」

それは風呂ではなく浴場と言っんですよ。

「いえ、全員は遠慮します・・・そうだ、男が入った後の風呂なんて嫌ですよ？だからマキナさん達が先に入ってください。料理とかで疲れたでしょう？」

「ありがとう、光治君は優しいのね。じゃあ私達は先に入るからね」

「はい、風呂から上がったなら部屋に来てください。俺達はそこで待ってますから」

「分かりました。」

「じゃあ、行きましょう」

マキナさんはそう言っ、綾香、鈴木、楓、葵を半ば強引に連れて行った。そして残された俺達男性陣は部屋に向かった。

場所は変わって俺達の部屋

今俺は部屋でダラダラしている。

祐介は”ゾンビ大。典”とかいう奴を読んでいて、吉彦はベースを弾いていて、光太は仮眠をとっていて、隆二は外でタバコを吸っている。

さっきから女性陣の声が聞こえてくる。多分、女性陣の音がデかい、風呂改め浴場が近くにあるんだろうが、はっきり言っ俺は興味がない。

いきなり祐介は”ゾンビ大。典”を閉じて吉彦はベースを置いた。

「今なら”アレ”をやるチャンスだ」

「やるんだな”アレ”を」

コイツらまさか”アレ”をやるのか？いやまてよ、もしかすると”アレ”じゃないかもしれないから一応聞いてみるか。

「一応興味ないけど聞くぞ。何をするきだ？」

「何っ、そんなの決まってるだろ」

「そうだよ。風呂を覗くに決まってるだろ」

ああ、やっぱりね大体予想は付いてたよ。

「別に俺は止めはしないが一言言っておく。”命を大事にしろ”」

「「わかった、じゃあ行つたくる」」

うん、全然分かってないね。”命を大事にしろ”というのは「やめ
といた方が良く」と言う意味なんだけどなあ・・・
もう仕方ないね、逝つてらっしゃい。

そして祐介と吉彦は部屋から出ていった。

アホ二人が浴場に向かつてから少し経つと光太が目を覚ました。

そして、辺りを見回してから

「あれ？他の先輩方は何処に行つたんですか？」

俺に隆二とアホ二人の計三人の行方を聞いてきた。

「隆二なら外でタバコを吸ってる。後の二人は・・・・そう、地
獄に逝つた」

「そうですか・・・え？地獄？」

光太、お前はまだ分からなくて良いんだ。

光太がさっきの”地獄”について考えてると隆二が戻つて来た。

「今さっき祐介と吉彦が廊下を歩いてたが、アイツ等何処に向かつて
たんだ？」

「ああ、多分地獄だろ」

「なんだ地獄か」

「何で平然としてられるんですか……」

俺と隆二の平然としたやり取りに対して、光太は啞然としていた。その後二人の悲鳴が神社中に響きわたった。

マキナさんがいるから止めた方がよかったのに。

しばらくすると、浴衣姿の女性陣が縄で拘束されている気絶した祐介と吉彦を連れてやって来た。

「ちょっと！何でこの変態コンビを止めなかったのよ！」

鈴木が真っ赤な顔で怒鳴ってきた。すごい剣幕だな……

「警告はしたさ、でもそのアホが理解しなかったただだよ」

確かに俺はちゃんと警告はした、”命を大事にしろ”とちゃんと言った。

「……ハア、今度からはこの変態達が理解出来る言葉で警告し
といて」

「わかったよ」

どうやら鈴木は俺の言った事に呆れたらしく、注意だけして、この事件は終わった。

「じゃあ俺らも入ってくるかな。そのアホ達が起きたら浴場に行け
って言っといってくれ。じゃあマキナさん、浴場までの案内を頼みま
す」

俺と隆二と光太の三人はマキナさんについていった。もちろん入浴
場面は全面カットだからな。

男のなんてただ気持ち悪いだけだからな。

そして、浴場から出た俺達（祐介と吉彦は合流済）は特にすること
はなかったので、部屋に戻って布団をだして直ぐに寝た。

朝になったらしく俺は偶然顔にさしこんできた日の光によって起こ
された。布団から体を出そうと動くと、足が何かに当たった。

「なんだ？」

俺は恐る恐る掛け布団をめくるとそこには……楓がいました。
浴衣が崩れてて何かセクシーだな……って、なんで居るんだよ！！

「……………う……………うう」

どうやら楓が目を覚ました様だ。

「光治か……おはよう……」

「おはようじゃねえよ……何でお前が俺の布団に入ってるんだ
？」

俺は何故楓が此処にいるのか聞いてみる。

「確か・・・夜中に一回起きてトイレに行ったのだが・・・それから覚えてなくてな・・・まさかお前が此処に運んできてくれたのか!？」

「いつとくが、俺は一回も起きてないぞ」

楓が何か勘違いをしていたので俺は一回も起きてないと言った。

「そうか・・・じゃあ、おやすm」此処で寝るんじゃないかな、なんだ？」

楓が寝ようとしたから、俺は浴衣を掴んで寝るのを阻止した。

「寝るなら部屋に戻れ」

「別に良いじゃないか。私達は夫婦なんだk」部屋に戻れ」ケチ・・・」

俺がもう一度言うと楓は仕方なく布団から出て自分の部屋に戻っていった。俺はとりあえず布団から出て厨房に向かった。

厨房には・・・誰もいなかった。

俺は水道の水で顔を洗って部屋に戻ろうてすると、偶然木刀を持ったマキナさんと出会った。

「あら光治君、おはよう。此処で何してるの？」

「おはようございます。」

日射しに起こされたんですよ」

「それはついてないわね。あそこの部屋は朝になると一カ所だけいつも日射しが差し込むのよね」

ああ、不幸だ・・・

「そうなんですか。」

マキナさんは何をしてたんですか？」

「私はちよつと道場で素振りしてたのよ」

マキナさんは持っていた木刀を俺に見せながら答えた。

つか道場って、この神社どんだけ広いんだよ・・・って、あれ？この木刀って

「その木刀ってひょつとして、鈴木の木刀ですか？」

「そうよ、李奈ちゃんが寝てる時にこっそり借りたの。李奈ちゃんの寝顔可愛かったわよ」

「そ、そうですね・・・」

寝顔はあまり興味はないけど、こっそり借りたって、巫女さんがそんなことして良いのかよ・・・

「そついえば私が起きた時、楓ちゃんが見当たらなかったんだけど、知らない？」

「楓なら、さっきまで俺の布団に入ってたけど今は部屋に戻りましたよ」

「あらあら、熱愛ね」

「違いますから」

違うからね、あれは楓の奴が勝手に俺の布団に入り込んで来たんだからね。

「じゃあ俺は他の奴らを起こしに行くのでこれで」

「じゃあ、ついでに李奈ちゃんに木刀返しといてね。あと、起きてたら「木刀借りてたわよ」って伝えといてね」

俺はマキナさんに鈴木の木刀を渡された。

「わかりました」

俺はそう言って厨房から出て女性陣の部屋に向かった。そして部屋の前に着いた。

本来なら入れない禁断の間だが、俺はただ木刀を置くだけだからな。言うておくが、別にやましい事は考えてないからな。

俺は襖をゆっくりと開けた。

部屋にいる全員はぐっすりと眠っていた。

えっと鈴木は……いた。しかもよりによって奥の方かよ、不幸過ぎるってこれは……

俺は比較的安全なルートを通って行き何事もなく鈴木の下に辿り着いた。

鈴木は静かに寝息を立てていた。

『李奈ちゃんの寝顔可愛かったわよ』

ふと、マキナさんが厨房で言った言葉が頭の中に出てきた。
違う違う、目的は木刀を置くだけだ、木刀を置いたらさっさと出ていけば行くだだけだ。

俺は鈴木 of 枕元にそつと木刀を置いた。

よし、これで大丈夫。後は部屋から出るだけだ。俺が引き返そうとした瞬間

「・・・・・・・・う・・・・・・・・う・・・・・・・・」

と後ろから声がした。

俺が振り返るとそこには・・・・・・・・鈴木が起きていた。

鈴木と目が合い少しの沈黙の後、顔を真っ赤にして

「キャー」静かにしろ「っ！」

叫びそうになったから俺は咄嗟に手で鈴木の口を塞いだ。

まずいな・・・・・・・・とりあえず理由を言おう。

俺は自分の口の前に人差し指を立てた。要するに「静かにしろ」とかそついったジェスチャーみたいなもんだ。

俺のジェスチャー（？）を見た鈴木が頷いたから俺は鈴木 of 口を押さえていた手を離れた。

「ちょっと、なんでアンタが此処にいるのよ」

鈴木は小声で聞いてきた。やっぱり、そうくると思っていたよ。

「先に言っておくが、俺はアホコンビと違ってちゃんとした理由が

あるからな。」

本当だ。俺は祐介と吉彦のアホコンビの覗き未遂（未遂に終わったのかは知らないが）と違ってマキナさんに頼まれてるからな。

「わかったわ話して」

「俺はその枕元にある木刀を置きに来てただけなんだ。その木刀をマキナさんが使ってたらしくて、さっき偶然会った時に頼まれたんだ。ちゃんと伝言もあるからな「木刀借りてたわよ」ってマキナさんが言ってたからな」

「わかったわ、そうよね。昨日の夜にあの二人に警告したアンタがそんな寝込みを襲ったりする奴じゃないわよね」

どうやら鈴木は信じてくれた様だ。

まあ事実だしな。もし信じてもらえてなかったら、今頃ぶちギレてたな。

「じゃあ目的も果たしたから俺は出るよ。そうだ、俺が出たら三人を起こしてくれよ」

「わかったわ」

俺は行きと同じルートを通って行って、襖の前に行き襖を開けて部屋から出た。部屋から出ると、偶然廊下に出てきていた隆二と会った。起きてたんだ。

「お前何してたんだ？」

「俺はただ、マキナさんに頼まれた事を果たしてきただけだ」

隆二が聞いてきたから俺は正直に答えた。

「ふうん」

隆二は興味をなくしたらしく、部屋に引き返そうとした。

「隆二、部屋に戻るついでに他の三人を起こしといてくれねえか？」

「ああ、わかったよ」

「わるいな」

そして隆二は襖を開けて部屋に入った。さっき「面倒くせえ」と聞こえた様な気がしたが、きっと気のせいだろう。俺は再び厨房に向かった。

その後は全員で朝食を食って、ゾンビ発生が夢じゃなかった事を思い出した後、支度をしてマキナさんに神社の玄関まで送ってもらい今は玄関の前にいる。

「昨日は泊めてくれてありがとうございます」

俺は神社に泊めてくれたマキナさんに礼を言った。

「別に良いのよ。」

私も色々と退屈してたから楽しかったわよ」

「では、そろそろ行きますので「そうね、行きましよう」って、え

「？」

「行きましょう」って、どうゆう事だ？マキナさんは残らないのか？

「マキナさん、神社に残らないんですか？」

「あなた達といると楽しいから、私もついていきたくなくなっちゃったの」

「でもマキナさん、武器はどうするんですか？今は持っていない様ですし」

「俺は別に構わないよ。でも急いでるから待つてられないしなあ・・・」

「それなら大丈夫よ」

マキナさんはそう言って靴入れの扉を開けると、そこには・・・刀がありました・・・って

「「「「ええええええ！？」「「「「」

俺と祐介、吉彦、鈴木、光太は驚いた。

おかしいだろ！何でそんな所に武器があるんだ！？そんなのバ○オハ○ードでしか通用しねえぞ！

「これで良いでしょ？」

「は、はあ・・・」

こうして俺達は北斗マキナさんを仲間に加えた。
俺達は玄関を出るとそこには危険が満ちていた。

そこには、銃と刀を持っていたいかつい8人男達が俺達の方をガン見していた。

とりあえず警察じゃないとわかったから他の可能性を考えた結果・
・ヤクザだと分かりました。

俺達死んだな・・・

第9話 俺の周りは危険がいっぱい〓俺は不幸の塊（後書き）

御意見、御感想等お待ちしてます。

第10話 警察署がゾンビに襲撃されてたって、お約束じゃね？（前書き）

今回は、ほんのちょっと短めです。

アクセス数が3000を越えました。読んでくださった方々、ありがとうございます。

第10話 警察署がゾンビに襲撃されてたつて、お約束じゃね？

俺達今大ピンチです。

何故なら、マキナさんを仲間に加えて神社から出てみれば、なんと8人のヤクザ達がいるじゃないか！勿論刀、銃持ちです。

「お、おい光治どうするんだよ。ヤクザなんて話にならないぞ」

「知らねえよ。」

俺だつてどうしたら良いかわからねえんだ「お、おい光治」ん？何だよ祐介」

祐介が指を指した方を見ると・・・うわぁ、ヤクザめっちゃコッチ見てるよ、いかついって。

「光治、一体私達はどうなるんだ？」

楓まで、俺にどうするか聞いてくるのか・・・

「残念だが、こればかりはどうしようもないよ」

「さすがの光治もヤクザは無理か」

無理に決まってるだろ。

ヤクザなんてゾンビの何倍恐ろしいって。つて、やべえ・・・ヤクザがコッチに来やがった。心臓バクバクだよ、俺達一体どうなるんだよ。

ヤクザ達はとうとう俺達の目の前に来た。

俺達どうなるんだ？此処で短い人生に終止符が打たれるのか！？
そんな事を考えてるとヤクザ達はいつの間にか隆二の前に集まっ
ていて、そして思いもしない事が起こった。

「「「「「「「「「「若ああああ！ご無事で何よりです！」「「「「「「」

「おっ

「「「「「え？ヤクザが隆二に頭を下げて、しかも若って・・・ど
うなってんの？
などと考えていると、ヤクザ達が今度は鈴木の前へ行くと

「「「「「「「「「「お嬢もご無事で何よりです！」「「「「「「」

「あ、ありがとう」

今度はヤクザが鈴木に頭を下げて鈴木がお嬢！？

「おい鈴木と隆二、一体どうゆう事だ！？何でヤクザ達が頭をさげ
てんだ？」

俺は隆二と鈴木にどうゆう事を聞いてみた。

「隆二はね、「坂本組」の組長の息子なのよ」

「組長の・・・息子？」

「そうよ」

「隆二、今の鈴木が言った事って本当か？」

「ああ」

どうやら、鈴木と隆二が言ってる事は本当の様です。つか、ヤクザが学校に通つても大丈夫なのか？・・・あれ？鈴木が隆二がヤクザだと知ってるって事は・・・

「まさか、鈴木もヤクザの親なのか？」

「ち、違いわよ。」

ただ、お母さんが隆二のお父さんと友人だったただけだからね」

「つまり、お前の母親はヤクザと友人だったと？凄いな、お前の親は・・・」

「まあ、李奈の母親は昔最強のレディースで、俺の爺さんと李奈の婆さんにも有名な不良で友人だったからな」

「ちょ、ちよつと隆二！

何でそうゆう事ばらすのよ！」

はい、たつた今また凄い事が判明しました。

隆二の爺さんと鈴木ของ婆さんは不良で友人。そして、隆二の父親（組長）と鈴木ของ母親（元レディース）も友人だと言うことです。コイツ等どんな家系になつてゐるんだよ・・・

「若、お嬢！昔話をしてる暇はありません。早く組長の所へ行きましょう」

ヤクザの一人が隆二に組長つまり父親の元に行くように言った。

「何でアイツの所に行かないといけねえんだ？」

「何故って、こんな世界になっちゃったのですから、「坂本組」が一つとなって此処等一体を手に入れるためだと組長は仰っていました。」

さあ、他の奴らはほっておいて私達と組長の元へ行きましょう」

ひょっとして、隆二の組長ってかなりの野心家？

しかも、俺達はどうでも良いとね。

「おい、アイツに伝えといてくれ」

「アタシも隆二のお父さんに伝えたい事があるんだけど」

「はい、何でしょうか？」

「生憎、興味が無いからアンタの野望に付き合っ気はねえ。夢を見ながら死ねとな」

「え？・・・で、ではお嬢は？」

「アタシは仲間の方が大事なので貴方の元へは行きません。今の貴方は野心に取りつかれていますと」

「え？それはもしかして・・・」

鈴木と隆二はお互いの顔を見て頷いてから

「俺はアンタ等と一緒にには行かない（アタシは貴方達とは行かないわ）」

と言った。

「お願いします！どうか組長のm「失せろ、二度と俺達の前に現れるな」も、申し訳ありません！では失礼します」

ヤクザは何とか説得させようとしたが隆二の気迫に圧されたらしく、一人が他のヤクザに合図をすると7人のヤクザ達は去っていった。しかし、いくら組長の息子でも高校生に気迫負けするヤクザってどうなんだ？

「せめて、これだけでも持っていてください」

残ったヤクザは隆二に刀と短刀を渡してから去っていった。

「い、行ったな・・・」

「ああ・・・って吉彦、何ビビってた？」

「な、何言ってたんだよ。ビビってないからな」

え？何でこんな事を聞いたかって？それはね

「お前、足めっちゃ震えてるぞ」

俺が言った様に、今の吉彦の足はめっちゃ震えています。

「ち、違うぞ！こ、これは・・・楽しくて膝が笑ってるのさ」

「・・・・・・は？」

「先輩！今の事って本当何ですか！？」

隆二の言った事に対して光太が聞いた。

「ああ本当だ。

すぐに殺されなくても、奴隷の様にコキ使われて結局は殺される。
俺が今まで見てきた光景から、一つだけ言える事がある」

「・・・・・・そ、それは？」

「『坂本組』は最凶最悪の組だ。それに今はこんな時代だから女共は捕まったら生き地獄を味合わせられる」

隆二の言った事に俺達は絶句する。男性陣は隆二以外は即殺されるか奴隷扱いされて結局死ぬ。女性陣は鈴木以外が生き地獄を味会わされるって事は、強姦とかされちゃう訳だろ。
ヤバイって！『坂本組』

「じゃ、じゃあ行くか」

「ああ（ええ）」

「・・・・・・コク」

「なんだか楽しそうね」

隆二と鈴木は普通に返事をして、他は黙って頷いた。つかマキナさん！？一人だけ反応がズレてるんだけど！そして俺達は無言のまま

神社を後にした。

そして、石段を降りてきて街に戻って来た俺達だが、昨日いたゾンビの大群が一夜にしていなくなっていたから驚いた。

「い、いったい何処に消えたんだ？」

「うーん……そうだ、きっとゾンビ達は私達を諦めて別の場所に行ったんだよ。人がたくさんいる所とかに」

「おお、なるほど」

祐介と綾香のオカルトコンビが勝手に悩んで勝手に解決しているが無視。

「……先輩、これから何処に行くんですか？」

葵が聞いてきた。

そっか、行くところなんて決めてなかったな。

「そうだね」「警察署に行くぞ」って、は？」

祐介がいきなり警察署に行くとか言いやがった。割り込んできて何言っただるんだ？このオカルトオタクは。

「だから警察署だよ。」

警察署で銃とか警棒を手に入ればこの先楽になるだろ？特にゾンビや「坂本組」のヤクザ達に」

なるほど、無闇に撃つとゾンビを引き寄せてしまふ欠点はあるけど、ヤクザ達にも有利だからな。

「祐介、その低脳で良くここまで考えたな、ナイスだ」

「お前絶対褒めてないだろ！」

何か祐介がツツコミを入れてきたらしいが、そんなの気にしない。

「じゃあ、警察署に行くぞ」

場所は変わって警察署前

俺達は出会ったゾンビを片っ端から潰していつてようやく警察署前についたんだけど、酷い有り様だった。

ゾンビは今の所見当たらないが、警察署前は地面に血や肉片などが撒き散らされていて、さらに何か小さい金属の筒の様な物が散らばっていた。

これが”薬夾”ってヤツなのか？ちなみに俺は軍オタでもミリオタでもないから、銃の種類なんてM・O+で出てきたの位しか知らない。撃ち方？知るわけないだろ。

そっいえば一つだけ気になる事がある。

「警察署が壊滅してるのに何とも思わないのって俺だけ？」

「いや、俺もだ」

「私も」

祐介と綾香は俺と同じようだ、しかもゾンビ映画を見た組だけだ。ゾンビ映画ってのは人をここまで変えてしまうのか……恐ろしい！

「とりあえず中に入るか」

俺達は警察署の中に入った。中はとても静かだが、やっぱり床や壁には血が付いている。

「じゃあ二手に別れて武器を探すぞ」

俺がそう言つと皆は頷いた。

そして

俺、鈴木、楓、綾香、マキナさん

隆二、吉彦、光太、葵、祐介
と5人、5人に別れた。

それにしても、何で俺以外が全員女性なわけ？神様は一体どんな修羅場を期待してるんですか？

「俺達は一階で探すから隆二達は二階を頼む」

「わかった」

「もし武器を見つけたり、何かあったら携帯で連絡してくれ、良いな？」

俺が皆に聞くと皆は頷いた。そして隆二達のグループは二階に向か

った。

それを確認してから俺達も行動を開始した。

第10話 警察署がゾンビに襲撃されてたって、お約束じゃね？（後書き）

御意見、御感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9234x/>

日常が消えたこの世界

2011年12月15日20時50分発行